

装飾古墳に囲まれた『シラヌイ現象』

と鏡との考察(Ⅱ)

「垂下とは!」「ぼかされた3~4世紀の歴史を暴く」

◎特異な装飾文様である沈線

「垂下」の考察◎

装飾古墳のメッカである熊本県内では、石室内の壁画装飾が主体となる菊池川流域131基の古墳群と石障(石室を構成する板状の石材)や石棺などへの線刻・陰刻・浮彫装飾を主体とする宇土半島の基部を含む八代海沿岸部古墳群とに大別される。

内海である有明海と八代海(不知火海)を分断する宇土半島は、熊本平野の南部から約25km西方へ伸びその先は天草諸島で構成される。

宇土半島の基部と沿岸部及び天草諸島とその対岸に位置する八代平野には、八代海を取り囲むように30基もの装飾古墳が点在している。そこで、装飾を幾何学文様【円文・同心円文(含む二重円文・三重円文)・直弧文・三角文

など】に限定してその分布域と当該古墳数を調査した。(図200参照)

- ・宇土半島の基部に5基。
- ・宇土半島沿岸部に5基(宇城市と宇土市の有明海沿岸に各1基・宇城市の八代海沿岸に3基)。
- ・上天草市の天草諸島沿岸部(大戸ノ瀬戸)に3基。
- ・八代平野(八代市・氷川町)に8基
計21基の存在が判明した。

しかも、八代海(含む有明海南沿岸部1基)を取り囲む装飾古墳には、全国的にもこの地域に限定される特異な装飾である※沈線「垂下」を施した古墳が10基程確認された。

(※垂下は円文及び同心円文の外円と接する上下、左右の直線)

装飾技法に同一性が見受けられることから、古墳の被葬者たちは己の生涯を通じて遭遇した最も神聖で貴重な体験を古墳に刻むと言う思想的背景においての共通性が窺われる。

九州北部における古墳の石室構造と文様の変遷(発生地域と年代)などに関して熊本県教育委員会2020.3『八代海周辺の装飾古墳・発生と展開 熊本県文化財調査報告書 第337集』では次のように解説している。

「1970年までの研究では、4世紀頃、畿内及びその周辺で直弧文や円文を描くこと



図211 長迫古墳石材の装飾文
出典：熊本県教育委員会(1984)「熊本県装飾古墳総合調査報告書」p175, 67の4図

から始まり5世紀の前半で途絶えたとされている(先駆的装飾)。

その後5世紀中頃有明海沿岸で石人山古墳の妻入家形横口式石棺に直弧文が描かれることから新たに始まったとされた(初期装飾)。

また八代海沿岸の長砂連古墳の直弧文は石人山のものに類似することからそれに続くものとされ、有明海沿岸・八代海沿岸の装飾古墳が古いことが指摘されている(小田1974)。

他の書籍も同様であり、初期の古墳として石人山古墳があげられ、周辺にも装飾のある横口式石棺が分布することから有明海東部沿岸地域で装飾古墳が始まり、その後八代海沿岸に伝わったと考えられていた。

ところが1994年の高木恭二の石室構造変遷の研究により、八代海沿岸には長砂連古墳より古い装飾古墳が存在し、前方後円墳集成編年5期であるとされた(高木1994a)。

同じく高木の一連の石棺研究により、有明海東岸の妻入横口式家形石棺は、菊池川流域や氷川流域で製作されたことが解明された(高木1987b・1994b)。

更に1998年に「八女古墳群の再検討」をテーマに開催された第1回九州前方後円墳研究会で、有明海東部沿岸地域の妻入横口式家形石棺の年代について前方後円墳集成6期から7期に位置付けられたこと(岸本1998・神保1998・市川1998)から、装飾古墳の発生は八代海沿岸地域から始まったとの認識が一般的となっていく。

一方で初期装飾の始まりが5世紀前半頃まで遡ったことで、先駆的装飾との時期差が縮まったが、先駆的装飾は本当に途絶



図212 直弧文が描かれた妻入家形横口式石棺
石人山古墳 (福岡県八女郡)

えたとと言えるのか、系譜が違うのかということについては研究はあまりされていない。

八代海における最古の装飾古墳は円文をもつ小鼠蔵1号墳(乙益1984c)とされ前方後円墳集成5期に位置付けられている。」

要約すると、日本の装飾古墳は4世紀の畿内(安福寺境内の割竹石棺)及びその周辺と熊本県の八代海沿岸地域(小鼠蔵古墳)を起源とし、九州では、八代から天草(長砂連古墳)、福岡県南部(石人山古墳)・宇土半島へと分布域を広め、北上して菊池川流域に及んだことで装飾古墳文化は九州全域において隆盛を極め、反面畿内では5世紀の前半で装飾古墳は途絶えたとしており、その要因についての言及はない。

一つの文化が途絶えるということはそれ相当の重大な出来事が発生していると思われるべきで



図213 長砂連古墳石室実測図



図214 小鼠蔵3号墳
(円文) 小鼠蔵1号墳と同年代と想定される
(築後国造 提供)

あろう。

畿内において装飾古墳が途絶えた要因としては、ヤマトの北部九州から近畿への東征の影響が考えられ、畿内への侵略は本格的装飾古墳文化の発展に終止符をもたらしたのである。

ヤマトの影響外であった九州では装飾古墳文化は隆盛を極めたが、原住民側のキングである筑紫君磐井がヤマトの謀略に陥り無念にも敗北を喫したことで東日本を除き装飾古墳文化は廃れていくのである。

ヤマトの侵略以前の近畿では、多くの古墳がナガスネヒコを王とする原住民側の手により築造されていたと推測されるが、明治に至り新政府は陵墓整備を推進して原住民側の古墳

を歴代の天皇及び皇族の墓に次々とすり替えて陵墓に指定している。

ようするに、皇室・皇統による同一の血統・血筋が永久に続いていることを意味する「万世一系」なる思想の正当化の証明に陵墓整備が利用されたのである。

宮内庁が一方的に陵墓を管轄下に置き公開、学術調査を頑なに拒む背景には、九州同様に宇宙と原住民とのコンタクトを証した正義の象徴である石室内部に刻まれた太陽マーク（幾何学文様）の存在に怖れをなしているからに他ならない。

1872年(明治5年)何らかの理由で竪穴式石室があらわになった世界的規模を誇る五世紀中頃の大山古墳(旧仁徳天皇陵)に学術調査の光が差し込んだようではあるが、再び石室の扉は開けられることはないのかもしれない。

何故ならば、年代的に見て神武軍に抵抗した原住民側の古墳である可能性を捨てきれないからなのである。

高松塚古墳及びキトラ古墳はヤマト側の代表的装飾古墳である。

石室の装飾が示唆するように両古墳は大陸的要素が極めて強く、原住民が描く太陽マークとは無縁の古墳なのである。

何れにしても「垂下」の解明には、特異な文様を刻む古墳に囲まれた八代海(不知火海)がキーポイントとなってくる。

装飾古墳の起源の一つである八代平野における古墳の所在地は、干拓などの影響を受けて中世の海岸線と比較すると現在ではかなり内陸に位置するが、貝塚の上に築かれた古墳の存在の検討から古代における海岸線と現在の装飾古墳の位置はかなり近接していたと推測される。

干拓以前の大鼠蔵、小鼠蔵は海に浮かぶ離れ



図215 北神第3地点古墳
(円文) 兵庫県神戸市北区道場
(神戸市文化財課提供)

小島であったとの記録もあり、古代の八代平野の内陸部に位置した古墳からも海や天草諸島が一望できた筈だ。

八代海を取り囲む宇土半島沿岸、宇土半島基部、天草諸島沿岸、八代平野には21基の装飾古墳が点在し、そのなかの10基の古墳にはその地域に限定される垂下文様が施され(刻まれ)ている。

以下は、「八代海周辺の装飾古墳―発生と展開」及び「熊本県文化財調査報告書第68集 熊本県装飾古墳 総合調査報告書装飾」を参考とした古墳21基の概要である。

⑬ 三拾町板碑転用石障材（宇土市三拾町堂ノ本）

位置 緑川の支流である浜戸側左岸に位置する。以前は宇土市三拾町鋤崎に所在していたものを現在地に移している。

墳形他 横穴式石室の石障の一部。

装飾 4つに区分けした石障の上部に3個の円文を横に配し、その下部に直弧文(A型)空間・直弧文の線刻を描く。

年代 井寺古墳との直弧文の文様構成の類似から5世紀後半～末頃と推定。

⑭ 椿原古墳（宇土市椿原町金獄）

位置 宇土半島の主峰である大岳（標高477.6m）から東側へ派生した標高約40mの向陵先端部に位置する。

墳形他 隅丸の方墳・横穴式石室。

装飾 羨道部右側壁に矢印状と格子目状の線刻を描き、左側壁に浮彫の円文を刻む。

年代 7世紀初頭に推定。

⑮ 晩面古墳（宇土市立岡町晩面）

位置 石棺が出土した周囲との比高差約15mの独立丘陵の頂上部に位置する。

本来の墳丘盛土は殆ど流失して古墳そのものの詳細は不明。概要は熊本県庁の図を引用した京都大学の報告に基づく。

墳形他 円墳・組合せ式家形石棺

装飾 石棺の棺身内面には、北と西の両壁面に長方形の造り出し刀掛状突起が各2個あり、北壁ではその下部に円文を施す。

西壁には造り出しの北側に菊花紋の浮き彫りがある。

県庁保管書類の拓本には「径3寸8分の円文の中に16弁菊花紋の薄肉彫り」と記されているが、この菊花紋は偽刻とみなされている。

年代 5世紀後半頃と推定。

⑯ 潤野(ウルノ)古墳（宇土市立岡町中潤野）

位置 国道3号線松橋バイパス東側の向陵地から北瀬方向に延びる尾根の途中の麓からの傾斜がやや緩くなる付近に位置する。

墳形他 不明〔概要は現在熊本県立図書館に収蔵されている行政文書の写しである図面にに基づく〕

装飾 組合式家形石棺の棺身内面の刀掛状突起の上辺部に長方形枠を設け、その中に連続三角文と下部に4個の円文を施す。小口側内面にも3個の円文を施す。

年代 5世紀後半頃

⑰ 宇賀岳古墳（下益城郡松橋町松橋岩谷）

位置 宇土半島基部東側向陵の南端、宇賀岳(岡岳)と呼ばれる標高約65mの小向陵に位置する。

墳形他 円墳と推定・横穴式石室。

装飾 奥壁・両側壁に円文・三角文の線刻と、その上に彩色(赤・薄い赤・緑)

などを施す。

奥壁の石材の中段には2本の平行線が引かれその間には直径約10cmの11個の円文を配し、平行線の外側の上下に連続三角文或いは鋸歯文を施す。

年 代 6世紀前半頃

⑦ 鴨籠古墳（宇城市不知火町長崎坊ノ平）

位 置 不知火海を望む宇土半島基部南岸の城ノ越向陵の端部に位置する。

墳形他 円墳と想定・横穴式石室。

装 飾 石棺の棺蓋全面に線刻とその上に彩色を施す。

長辺斜面をそれぞれ5つに区画し、同心円文と直弧文を交互に施文。

小口部も2分割してそれぞれに直弧文を施す。

同心円文には上下に沈線（垂下）が認められる。

年 代 前方後円墳集成7期頃（5世紀中葉）

⑫ 国越古墳（宇城市不知火町長崎国越）

位 置 宇土半島基部南岸の亀崎向陵部にあり、八代海を臨む氷川町の野津古墳群を見渡せるところに位置する。

墳形他 前方後円墳・横穴式石室 亀崎古墳群（弁天山・国越・道面・八久保）の1基。

装 飾 石室奥壁前に置かれた遺体安置施設



図216 鴨籠古墳石棺
(熊本県立装飾古墳館提供)

である石屋形（平入りの横口式家形石棺）の屋根・奥壁・両袖石の前面に線刻し、その上に彩色を施す。

石屋形の屋根の前面に連続三角文を施し、他の部分にも梯子型文と直弧文の一種である鍵ノ手文を施す。

出土品 四獣鏡/1・獣文縁獣帯鏡/1・画文帯神獣鏡/1・直弧文を施す鹿角製装具/1・他

年 代 前方後円墳集成9期（6世紀初頭～6世紀中頃）

⑭ 桂原（カズワラ）古墳・別称桂原白玉古墳（宇城市不知火町長崎白玉）

位 置 宇土半島南岸基部より2km程半島側に寄った向陵中腹に位置する。

墳形他 円墳

装 飾 奥壁上部に同心円文（一部欠損）1個の線刻と、その上に彩色を施す。

年 代 前方後円墳集成10期頃（6世紀後半～7

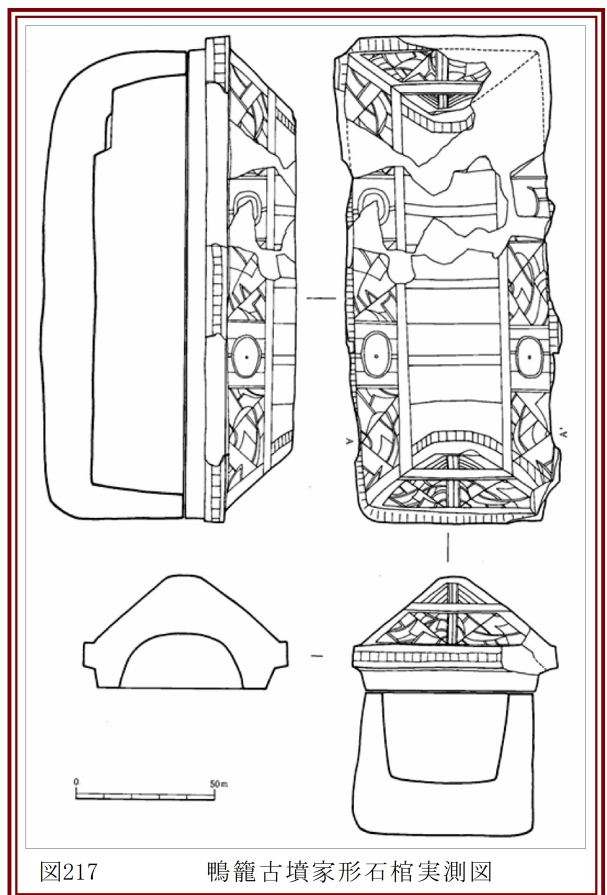


図217 鴨籠古墳家形石棺実測図



図218 小田良古墳
(熊本県立装飾古墳館提供)

世紀初頭)

⑮ ヤンボシ塚古墳 (宇土市上網田町字小宗)

位置 宇土半島の山塊から西側に派生する向陵の先端部で標高17m付近に位置する。

墳形他 円墳・肥後型横穴石室或いは石障系横穴石室。

装飾 左右障の内面に2個の円文(直径12.7cm・深さ3.5mm)を陰刻する。配置・間隔から本来は3個と考えられ、抜き取られている右石障にも同様の円文が施されていたと推定。

石障に直弧文の彫刻がある岡山市・岡山市の千足古墳との石室構築の類似性が指摘されている。

年代 5世紀前半代に推定

⑧ 小田良古墳・別称チンカンサン (宇城市三角町中村前畑)

位置 宇土半島の北岸で、この地点より東側(基部側)は干潮時には干拓が表われ、西側(半島先端部)は岩礁となる箇所のでその境界付近に位置する。

北側は6mほどで有明海に接し、南は4m程で国道57号線と接する。

墳形他 円墳と推定(墳丘消滅)・横穴石室石障と仕切り石が残存する。

装飾 4面の石障壁の内面に円文及び靫・盾などを刻み2枚の仕切り石を施ける。

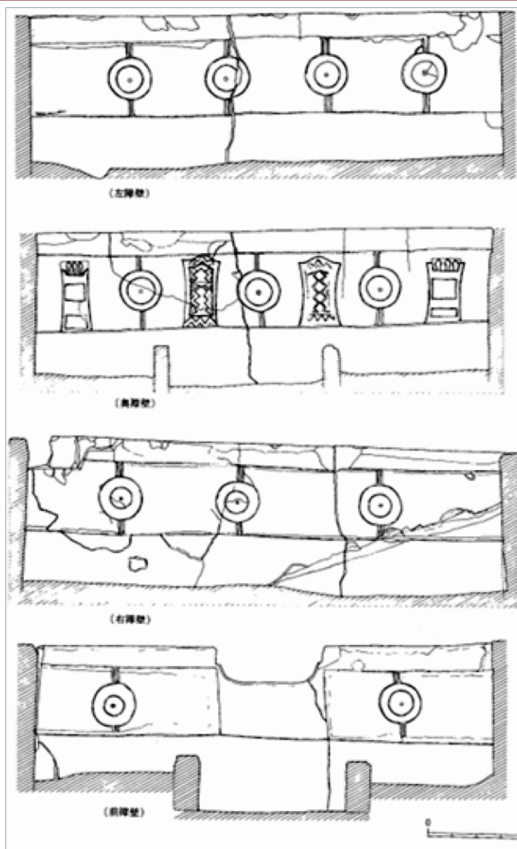


図219 小田良古墳実測図

奥障壁には左側より靫横→同心円→文盾→同心円文→盾→同心円文→靫の順に並ぶ。

左右障壁には4個の同心円文、右石障壁には3個の同心円文、前障壁には2個の同心円文を施す。

同心円文の外形は17.7cm前後が多く、内径は10.5cm前後のものが多い。

盾は線刻、それ以外は浮彫で、同心円文を挟んで上下に2本の沈線(垂下)を施す。

年代 前方後円墳集成6期(5世紀初頭頃)。

⑩ 長砂連(ナガサレ)古墳 (上天草市大矢野町中長砂連)

位置 天草諸島の玄関口である大矢野島の東南端に位置し、南東には広浦古墳、南南東には大戸鼻古墳群を望む。

墳形他 円墳と想定・横穴式石室。

発見時には封土の大部分を失い石室

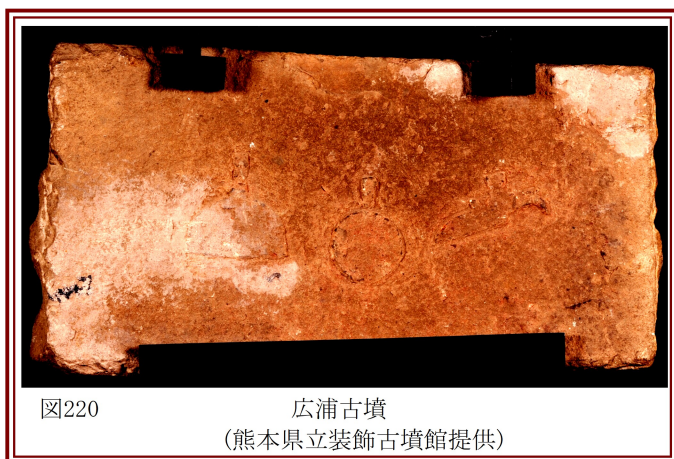


図220

広浦古墳
(熊本県立装飾古墳館提供)

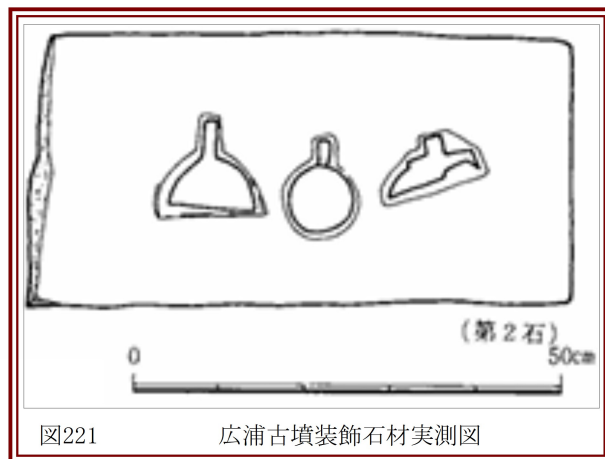


図221

広浦古墳装飾石材実測図

石材の散乱状態。板石を組み合わせ
た4枚の石障のみが残存。

装 飾 右石障には連続形の3個の直弧文を刻
み、両側に直弧文A型、中央には直
弧文B型を配す。

左石障には3つの区画があり、中央に
対角線門と円文を重ねて施し、その
両側に直弧文A型を施す。

年 代 前方後円墳集成6～7期(5世紀初頭～5
世紀中頃)。

① 広浦古墳群(上天草市大矢野町維和廣浦)

位 置 天草諸島の維和島(千束蔵々島)南端
の海に突出した上大戸鼻の丘陵に位
置する。

墳形他 小墳丘の円墳と推定。

装 飾 肥後型石室内部に大型の石棺1基、小
型の石棺2～3基が置かれていたとの
伝承あり。

装飾を有する石棺部材は合計4個で、
図柄のある部分のみを切り欠いて保
存していたと見られる。

第1石と第2石は熊本済々黌高等學校
が所蔵していたが現在は熊本県立美
術館へ寄託。

第1石には鞘に入った刀子状のものを
施す。

第2石には3つの浮彫状の装飾があり、

左にチリトリ形状のものを、中央に
は沈線(垂下)を伴う円文を施し、右
には刀子状のものを施す。

京都大学文学部が所蔵する第3石には、
上段に刀子状のものを、その下に直
径約15cmの円文を、その右に直径約
12cmの円文を施す。

年 代 前方後円墳集成5期頃(4世紀末)。

② 大戸鼻古墳群1・2・3(上天草市松島町阿 村大戸鼻)

位 置 天草上島の北北東、八代海に面した
下大戸ノ岬の向陵上に位置する。

大戸鼻北古墳1・別称鬼の池サン

墳形他 円墳

装 飾 石室に設けられた石障3面に円文を施
す。

奥正面石障に3個の円文(1個滅失)を、
右(東)石障に4個の円文を、左(西)石
障に沈線(垂下)を伴う縦長の円文を
施す。

年 代 5世紀前半と推定。

大戸鼻南古墳2

墳形他 小墳丘の円墳と想定(石室露出状態)・
箱型石室

装 飾 南側壁(西小口石材)上部に直径16～
18cmの3個の同心円文を施す。

2個の同心円文の内円外側には鋸歯文

と2条の沈線(垂下)を施す。

同(西小口石材)の下部に“飛ぶ鳥の刻文”と推測された円文が施されていたが現在は滅失。奥壁(東小口石材)の上部にも直形7cmの円文を施す。

円文の形状の類似と施行位置に小鼠蔵1号墳との類似が指摘されている。

沈線(垂下)を伴う円文を紐で吊るした鏡に見立てている。

年 代 5世紀後半と推定。

大戸鼻石棺3

墳丘他 不明・箱式石棺

装 飾 石棺内面に赤の円文が描かれていたというが現在その石棺は所在不明。

⑥ 竜北高塚古墳 (八代郡氷川町高塚西新城)

位 置 砂川下流右岸の向陵裾部に位置する。

墳丘他 円墳・組合式冢形石棺

装 飾 石棺内面の棺身(小口・側壁各1石の計4石)と棺蓋に円文を施す。

棺身の西側小口には長方形の区画(現在は滅失)の中に浮彫の3個の円文を配し、両端の円文には2条の沈線(垂下)を施す。

東側小口にも長方形の区画の中に3個の浮彫りがあり、左側は円文、中央は上部が欠けているが靫が刻まれ右

側の文様は風化状態で不明。

また刀子や直弧文の可能性が指摘される直線と弧線が認められる。

棺蓋には、内面頂部に長方形の区画を設けその両端に各1個の円文を施す。

年 代 前方後円墳集成6期(5世紀初頭)。

⑩ 門前2号墳 (八代市岡町大字谷川字門前)

位 置 八代平野を見下ろす竜峯山の西麓を走る九州縦貫自動車道に近い標高10m前後の集落内に位置する。

墳丘他 円墳・内部施設は未調査だが田川内1号墳と同様の石障を有する石室である。

装 飾 石材/1、浮き彫りに近い3個の同心円文(2重円文)が並ぶ。向って左端の円文と中央の円文は1本の線刻で結ばれ、表面を赤く彩色した痕跡が認められる。

石材/2 内円直径12cm、外円直径26cmの同心円文を施す。

石材右側にも微かな円文の痕跡が認められる。

出土品 内行家文鏡/2・獣首鏡/1他

年 代 前方後円墳集成7期を想定(5世紀前半～5世紀中頃)

⑪ 小鼠蔵古墳群1・2・3 (八代市鼠蔵町小鼠)



図222

大戸鼻古墳
(熊本県立装飾古墳館提供)

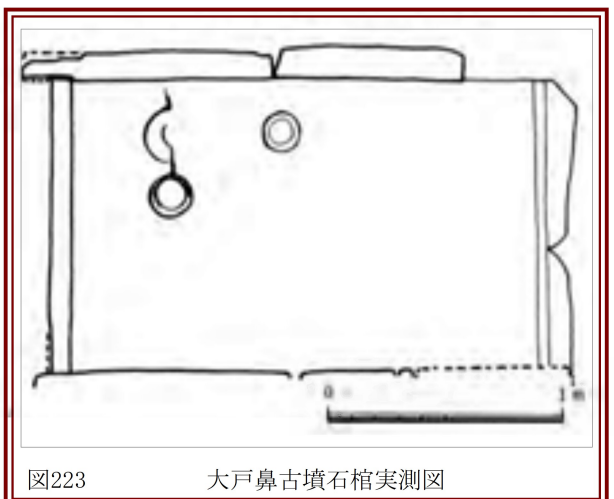


図223

大戸鼻古墳石棺実測図

蔵)

位 置 球磨川河口に形成された三角州の南端にある2つの向陵の小さい向陵を小鼠蔵山(標高35.5m)と呼称する。以前は海中にあった小島が江戸時代の干拓で陸続きとなる。頂上には5基の古墳があったが、1号・2号・3号のみが残存。

小鼠蔵1号古墳

墳形他 円墳・横穴式石室の箱式石棺で方形に石障を組む。

装 飾 石棺内(中央区画)の西側内壁に直径約7cmの1個の円文を施す。

年 代 前方後円墳集成5期頃(4世紀後半)

小鼠蔵3号古墳

墳形他 墳丘を構築せず・組合式箱式石棺主体部のみを尾根上に埋設と想定。

装 飾 北長側壁と南長側壁に計4個の円文を施す。

北長側壁の中央付近に直径9cmの2個の円文と右下方に直径6.5cmの1個の円文を施す。

南長側壁の棺材のほぼ中央部にも直径9cmの1個の円文を施す。

年 代 1号墳と同年代と想定。

⑤ 大鼠蔵古墳群1・2・3・4(八代市大鼠蔵町大鼠蔵)

位 置 球磨川河口に形成された三角州の南端にある2つの向陵の大きい向陵を大鼠蔵山(北側頂部46.3m・南側頂部42.1m)と呼称する。

以前は海中にあった小島が江戸時代の干拓で陸続きとなる。

計16基の古墳が確認されている。

大鼠蔵尾張宮古墳1

墳形他 円墳と想定・横穴式石室内に石障を設ける。

装 飾 奥壁側の石障上段に直径10.6cmの3個の円文を等間隔に施す。

年 代 前方後円墳集成5基頃と推定(4世紀後半)

大鼠蔵東麓1号古墳2

墳形他 工事中の発見で詳細は不明・箱式石棺と推定

装 飾 西側壁の石材に5点の線刻があり、彩色(赤)を施す。

左から半月形の弓か舟、5本の矢を並べた鞆、2本の沈線(垂下)を伴う同心円文、三角板を使った短甲、鞆に納められた太刀とその下に2本の沈線(垂下)を伴う同心円文を施す。



図224

竜北高塚原古墳
(熊本県立装飾古墳館提供)

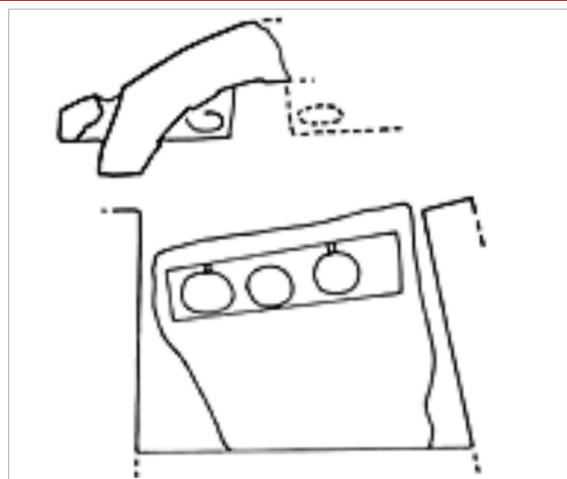


図225

竜北高塚原古墳石棺実測図



図226

門前2号古墳裝飾石材

(熊本県立裝飾古墳館提供)

裝飾石板は現在八代市立博物館に保管・常設展示中。

年 代 5世紀前半頃と推定。

大鼠蔵東北麓2号古墳3

墳丘他 不明・組合式箱式石棺と推定(戦後、この東北側脚線部の土取り工事で3基が発見されたが粉碎される。

装 飾 箱式石棺の側壁に直径10～12cmの3個の二重円文を施す。石材の所在は不明。

年 代 不明。

大鼠蔵西北麓2号古墳4

墳丘他 不明・割石積みの横穴石室(土砂採掘中に4基発見されたが3基は粉碎される。

残る1基も石積の一部が残っていたがその後消滅)。

装 飾 最後に消滅した古墳石室内部の右側壁に3個の2重円文を施す。

年 代 不明

㊹ 五反田古墳(八代市敷川内町五反田)

位 置 八代平野を流れる敷川内川により形成された扇状地の先端部に位置する。

墳丘他 不明・割石を小口積みにした縄文中期の貝塚の上に造られた横穴式石室と推定。

大きく破壊された南壁(奥壁)と東壁最下部の3～5段ほどが残存する。

その付近に石障と考えられる石材A・石材B・石材Cが残存する。

出土物 捩紋鏡/1(内側の模様が巴型銅器と類似、同范鏡が島根県刈捨古墳から出土)

須恵器〔円文や4重円文を描く提瓶/2〕

装 飾 石材Aと石材Bに直径13～14cmの円文を各々2個施す。

年 代 前方後円墳集成6世紀～7世紀(5世紀初頭～5世紀中頃)

㊸ 長迫古墳(八代市日奈久大坪町大坪川)

位 置 八代市日奈久大坪町の三方をなだらかな向陵に囲まれた迫(谷)に位置する。

北側の向陵上(塩釜山)には塩釜古墳が、南の向陵先端部には田川内古墳が位置する。

墳丘他 不明(破壊が甚だしい)・横穴式石室

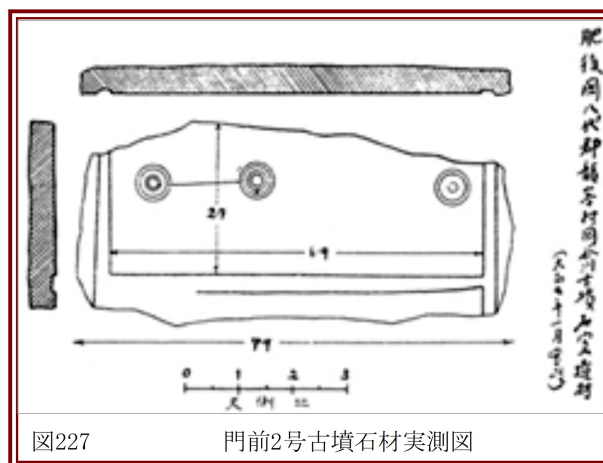


図227

門前2号古墳石材実測図



図228

大甕蔵東麓1号古墳

(熊本県立装飾古墳館提供)

割石積の内側に板石を四方に並べ、中央に箱式石棺を置いた状態と推定。

装 飾 同古墳石障石材〔1：日奈久阿蘇神社素材石材、2：日奈久山下町の個人所有石材、3：東京国立博物館所蔵石材、4：東京国立博物館所蔵石材(平成館展示)〕、以上4点に円文・同心円文を施す。

1：上縁から沈線(垂下)を伴う4個の2重同心円文を等間隔に施す。

2：同石材と角田家所蔵の石材は割れ目が符合、もとは1枚の石材と判明。両石材には、沈線(垂下)を伴う4個の2重同心円文が施されていた。

3：前障にあたる石材の内面・外面両面にも円文を施す。

4：上縁から沈線(垂下)を伴う6個の円文及び同心円文(三重円文)をほぼ均等に配す。2個は円文と同心円文で

あるが、他の4個には同心円文の外円の外側を精緻な連続的三角文で縁取が施されている。

年 代 5世紀代中葉頃と推定

⑨ 田川内古墳群1・2・3(八代市日奈久新田町)

位 置 古墳群のある田川内集落は八代市南部の日奈久新田町にあり、近世の海岸線まで約200mの向陵先端部である菅原神社境内の西南部に位置する。

田川内1号古墳

墳丘他 円墳(補修工事の際に復元)・横穴式石室古墳は縄文中期から後期にかけての貝塚の上に築造。石室は奥に向かってやや広がった正方形に近く、石室四方の壁の前面に石障をぐるりと設け、内部は板石を立てて仕切りをコの字形に作り中央部分に通路を設ける。

装 飾 古墳石室の石障や仕切り石に剥落欠失したものを含め計12個の二重円文と3個の円文を施す。入口の石障の外側に2個の二重円文を、奥と左右の石障には各々3個の二重円文を、奥の仕切り石に3個の円文をそれぞれ施す。左右障の中央部の二重円文は剥落欠失している。

二重円文の外円の直径は18～20cm、

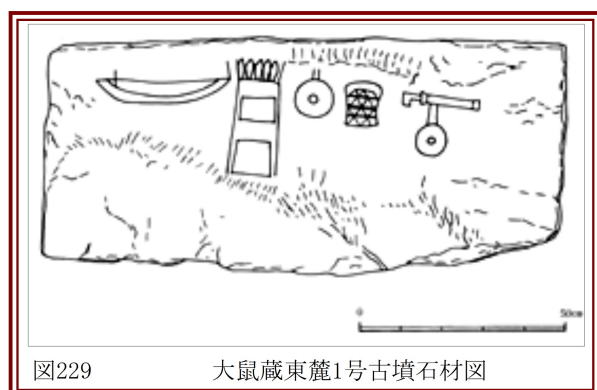


図229

大甕蔵東麓1号古墳石材図



図230

長迫古墳石材の現状

出典：熊本県教育委員会(1984)p175

内円は6～7cm。

円文の大きさも内円同様に6～7cmと揃えていることと、装飾を同じ高さや等間隔となるように割付していることから優れたデザイン性が感じられる。

石室内面には赤色顔料(ベンガラ)の塗布が施されている。

年 代 前方後円墳集成7期頃(5世紀前半～5世紀中葉頃)

田川内2号古墳(菅原神社境内北側の畑の中)
墳丘他 不明・箱式石棺と推定。現在は墳丘の一部を残しほぼ消滅。

側壁の石材が1号墳の垣内に保管されていたが現在は不明。

装 飾 石材上部に3個の二重円文を陰刻。
左側と中央の二重円文を弧線と直線でつなぎ、その中に三角文2個を施す。
右上端に鞍を思わせる線刻がある。

年 代 田川内1号墳に同じ。

田川内3号古墳(田川内1号墳近くと推定されるが地点は不明)

墳丘他 不明 石材2枚が1号古墳の墳丘南側の藪の中から発見される。

装 飾 石材に1個の二重円文を陰刻、もう1

枚の石材にも1個の円文を陰刻する。

円文を施した石材のみ1号墳の入口に保存。

年 代 6世紀頃

④ 竹ノ内古墳(八代市日奈久竹之内町)

位 置 不明(装飾石材が竹之内神社近くの線路脇にあったといわれ、現在は近くの個人宅裏庭の祠内に移設)

墳形他 不明・石材の形態から箱式石棺と推定。

装 飾 石材の右側を上部とすると、元々は2本の沈線(垂下)を施す直径18cmの1個の円文が施されていたが、他の資料では計5本の沈線が施されており、追加の沈線3本は偽刻と推測される。

年 代 5世紀後半

※古墳番号は図200に準ずる

以上、幾何学文を装飾した八代海周辺の古墳21基の概要である。

次に沈線(垂下)の考察にあたり、埋葬形態が著しく異なる畿内と九州の古墳における専門家の見解を紹介する。

① 初期装飾の目的は辟邪・鎮魂ということは古くからいわれており、加えて八代海沿

岸の箱式石棺の装飾については副葬品の代用としての目的も考えられている(乙益重孝1974)。

- ② 和田晴吾は棺の機能に着目し、遺体を密封するものという考えが極めて薄いものを「開かれた棺」とし、隙間のない密封された棺を「閉ざされた棺」とした(和田1989)。
- ③ この概念の提唱依頼埋葬方法や葬送儀礼など埋葬習俗の観点からの研究が見られるようになる。遺体を納める「棺」とそれを保護する「槨」は、遺体に邪悪なものが寄り付かないように、邪悪なものが寄りついて暴れ出さないようにする装置とし、僻邪・鎮魂・密封といった性格を合わせもつ棺を「閉ざされた棺」とし、畿内の横穴式石室は「棺」と「室」で二重に密封されるとした(和田2003・2007)。
- ④ 一方九州の横穴式石室では石障や仕切石など遺体を直接安置する諸施設が発達し、それらを「開かれた棺」と呼んだ。畿内系の横穴式石室は密封型の「閉ざされた棺」であり石室内空間は死者が自由に浮遊できないものであったので装飾は施さず、一方、九州では死者が石室内を自由に浮遊できる「開かれた棺」であったことから、石室内に邪悪なものが侵入しないように、邪悪なものが侵入して暴れ

出さないようにとの工夫が装飾であったとする。また初期の装飾は、槨や室に対するものはほとんどなく、棺の僻邪・密封或いは棺に相当する石障の僻邪をより確実にするものであったとする(和田2014)。

- ⑤ 広瀬和雄は、初現期の装飾古墳として大阪府の安福寺所在の割竹型石棺をあげ、その淵源として、鏡面を外側に向けて割竹型木棺を覆っていた奈良県天理市黒塚古墳や奈良県川西町島ノ山古墳など、それらがもつとされた呪力で遺骸を封じ込め、邪悪なものの侵入を防ぐ僻邪の観念に行き着くとした。

やがて象徴性をおびて鏡文や同心円文に形象化されていった可能性を指摘している。次の段階の装飾は石棺・石障という狭い場所が僻邪空間であったとする。

その後玄室全体に施文範囲が拡大していく時期に「靈魂観」が成立し、動かない遺骸から、石室内を浮遊する靈魂が僻邪の対象となったとする(広瀬2009)。

- ⑥ 河野一隆は、装飾は誰に見せるものか(被葬者・会葬者)、いつ描かれたという問題を提起し、また「開かれた棺」「閉ざされた棺」を被葬者の視点で見ると「開かれた棺」では「被葬者は見せられ」、「閉ざされた棺」では「隠される」ことになり、装飾古墳本来の使われ方は前室に控えた会葬者が壁画で彩られた空間の中で被葬者と対面するための場所とする。装飾古墳とは死者を見せる「開かれた棺」を採用した葬送思想と密接に関連して生み出されたとする。ついで鎮魂・僻邪の方向性が被葬者に対するものか、外部から憑依するものかの問題についても取り上げ、外部からの邪物に対応しようと思えば石障外側に施文すればよいとし、武

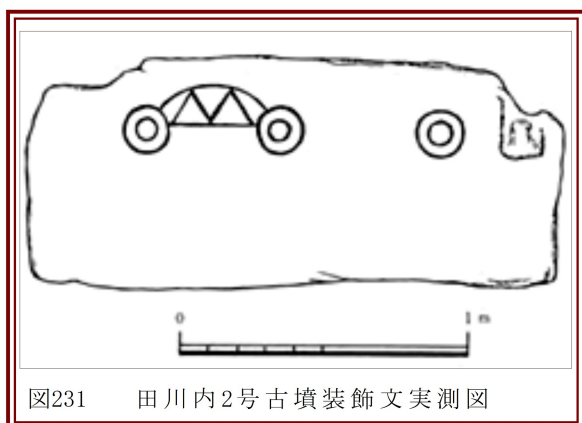




図232 竹之内古墳
(熊本県立装飾古墳館提供)

器・武具の表面を被葬者に見せていることは、被葬者に対する「封じ込める力」が作用していたとする(河野2011)。

- ⑦ 以上の論からは装飾の目的はやはり僻邪・鎮魂であり、分布が九州に集中することも畿内とは死生観が異なっており遺体を密封することのない「開かれた棺」であったからと考えれば理解できる。

畿内では石棺を更に竪穴式石槨で囲う、横穴式石室内にも密封できる棺を安置するなど、二重の封じ込めである。横穴式石室も開かれた遺体安置施設であり、一重の封じ込めであるので僻邪のため装飾が描かれた。

しかし同じ開かれた棺でも北部九州の初期横穴式石室には装飾が施されないし、石障系石室の中でも装飾のないものもある。このことについて、開かれた棺であることに加えて、さらに何らかの要因があったであろうことが考えられるが、明確な回答はでていない。

また当初石棺の外面に装飾が施されていたが、八代海沿岸では、石障の内面、石棺の内面に描かれることへの変化も納得

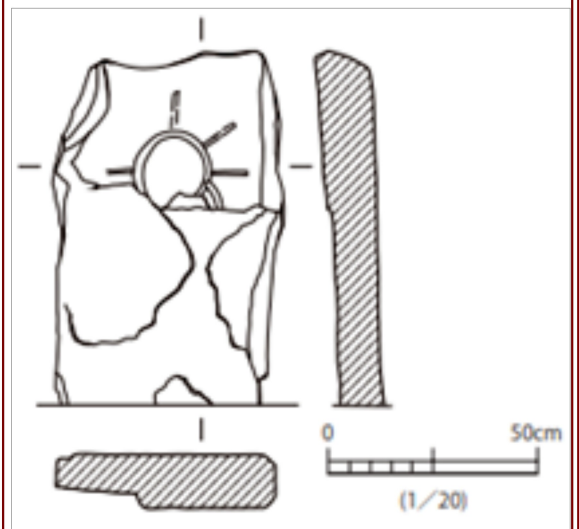


図233 竹之内古墳装飾石材実測図

できるような回答は出ていない。

当初は外部の邪物に対応していたが、八代海沿岸では被葬者を封じ込める方向に変化したのだろうか(古城2020)。

- ⑧ これに対し、初期装飾の目的は乙益同様、副葬品の代用とし、開かれた棺では僻邪の意味はなさず、直弧文も単なる文様に過ぎないとする考えも出されている(甲元真之2017b)。
- ⑨ 確かに初期の装飾古墳は、小規模な円墳の主体部であるので、副葬品の代用として描かれた可能性はあるし、石棺や石障の内側に描くことも副葬品と考えれば納得がいく。
- ⑩ 宇野も小鼠蔵1号墳の円文は、前期古墳に見る頭上に副葬された鏡を想定させるとしている(宇野慎敏008b)。
- ⑪ 前方後円墳の主体部である北部九州の横穴式石室では副葬品は豊富だろうから副葬品の代用として装飾を描く必要はなかったであろう。装飾自体が「文様」表現に過ぎないとすれば、石障系石室の中でも描かれない古墳があっても不思議ではない。
- ただ初期装飾の文様は、鏡(円文・同心円



図234 安福寺境内石棺蓋
(直弧文) 大阪府柏原市王手町
迫原市教育委員会文化財課提供(安福寺)

文)以外は刀・靱・盾などの武具であり本当に辟邪の目的がなかったのか。前期古墳での頭部付近の鏡の副葬も辟邪の意味合いがあると言われており(広瀬2009)、もう少し慎重に検討が必要であろう。

- ⑫ 装飾文様の変遷について高木恭二は、石製装飾の装飾古墳の文様は地域祭器のシンボルではないかとする。小地域ごとに円文・同心円文・直弧文・連続三角文・靱・盾などその地域の祭器シンボルとして単一文様であったのが、地域間の交流をきっかけに2種3種の文様を一緒に描くようになったことを想定している(高木1994c)。

一方、古城文雄は次のように解説する。

「まず装飾古墳の発生は、これまでの研究史をみると装飾の発生は辟邪・鎮魂のためと見る説、副葬品の代用と見る説などがある。精神的・思想的な面が大きく、なかなか結論のにくい問題である。

しかし、八代海周辺では、石障系石室の発生と装飾の発生はほぼ同時期と考えられるので、何故石障が発生したかを研究し、装飾の発生に迫ることも一つの方法であり、今回の視点も含め研究を行いたい。

次に装飾古墳の展開では、拡散するのは

石障系石室であり、八代海から宇土半島北岸の有明海側へと広がり北上していく、他に八代海周辺地域で製作された装飾のある妻入横口式家形石棺が有明海東部沿岸地域に運ばれている。

また装飾古墳が拡散していく時期以降に、装飾はないが九州外に運ばれた石棺も八代海周辺地域で製作されたものである。圏外の装飾古墳に共通するのは、文様は直弧文であり、石障や石棺石材は、阿蘇溶結凝灰岩に馬門石と呼ばれる宇土半島産の石材であり、この視点で鍵になる古墳を抽出したことで、装飾古墳が展開していく意義に迫り、八代海周辺の装飾古墳の発生と展開について日本の古墳時代史の中での位置付けを考えてみたい。」

一般論として装飾古墳の研究史では、畿内と九州の屍体(遺体)の安置施設である横穴式石室における玄室への埋葬状況から、密封埋葬(石棺への安置埋葬)形式を「閉ざされた棺」とし、非密封埋葬(屍床及び石障・仕切石への直接埋葬)形式を「開かれた棺」としている。

研究者は円文・同心円文としての装飾を鏡面に位置付け、鏡には特別な呪力があり辟邪(悪しきものを退ける)・鎮魂において重要な役目を果たしているという。

邪悪なものを退ける畿内の「閉ざされた棺」では装飾を必要とせず、九州の「開かれた棺」では遺体を邪悪なものから保護するべく装飾が必要であったというが、九州の石人山古墳(円文・直弧文)、鴨籠古墳(直弧文)、国越古墳(直弧文系統)及び畿内の玉手山3号墳出土と考察されている安福寺境内の割竹型石棺(直弧文)である「閉ざされた棺」にも装飾が施されていることと、八代海を取り囲む沿岸部の装飾古墳には沈線(垂下)を施した円文装飾が集

中しており、必ずしも邪気・鎮魂や副葬品の代用などという安易な発想で片付けられる問題でもないのである。

垂下を施した装飾古墳が八代海を取り囲む訳であるから八代海との関連性が強く指摘されるが、本題に入る前に僻邪と鎮魂の役目を担うとされる「鏡」について、その淵源とも目される古代エジプト、そして古代中国では鏡をどのように捉えていたのであろうか。

◎『鏡』と『太陽円盤』◎

現存する金属鏡ではエジプトの第六王朝(紀元前2,800年頃)の鏡が最古とされ、銅を主体とする合金の銅鏡である。

中国に起源を持つ銅鏡が日本に伝わったのは弥生時代の中期ころで後期の3～4世紀頃になると中国の銅鏡を模倣した仿製鏡が作られるようになった。

中国の歴史書「三国志魏書」の「烏丸鮮卑東夷伝倭人条」(うがんせんびとういでんわじんじょう)通称名「魏志倭人伝」には、景初3年(239年)に朝貢した邪馬壹国(邪馬台国：ヤマト)の卑弥呼に銅鏡100面を、その翌年にも面数は不明だが鏡が下賜されたとの記録がある。

日本では、仿製鏡を含む「三角縁神獣鏡」が3～4世紀の古墳時代前期に有力者の墓であろ

う前方後円墳から540面以上が出土する。

鏡の銘文及び魏の年号などの解釈の相違や成分分析などから三角縁神獣鏡が卑弥呼に下賜された銅鏡であるか、否かの論争が長きにわたって続いているが、その鏡の出土分布を調べると以下のような極端な偏りに気付かされる。

エリア総数と各県の出土数に基づく、九州・福岡(約70%)、群馬(約65%)、中国・岡山(約48%)・近畿・奈良(約40%)が他県との比較では高比率である。

またエリア別では近畿の出土比率が58%と異常に高く、その中でも出土数125面の奈良が突出している。

九州・福岡も奈良と似た状況を呈するが、反面、熊本・宮崎・鹿児島は極めて少ない。

奈良・福岡・岡山・群馬4県の出土比率が高いのは単なる偶然なのか、或いは4県に共通する何か別の要因があるのか。

三角縁神獣鏡以外の鏡の出土分布(表13参照)を参考にすると、出土数が高府県に先駆けて顕著に増加するのは福岡の弥生Ⅲ期からであると同様に大分、熊本は弥生Ⅴ期、山口、岡山は庄内式並行期(弥生Ⅴ期～古墳前期)から顕著に増加する。

【三角縁神獣鏡出土状況】

・エリア別出土数及び出土比率・府県別出土数(総数541面)

☆九州エリア 総数82(同15%)

【福岡57・佐賀5・大分11・熊本5・長崎0・鹿児島1・宮崎3】

☆中国エリア 総数56(同11%)

【山口11・島根5・鳥取7・広島6・岡山27】

☆四国エリア 総数13(同2%)

【愛媛3・香川6・徳島4・高知0】

☆近畿エリア 総数312(比率58%)

【奈良125・大阪47・兵庫47・京都65・三重13・滋賀13・和歌山2】

☆中部エリア 総数59(同11%)

【福井3・石川2・岐阜18・愛知17・静岡11・長野3・山梨5】

☆関東・東北エリア 総数20(同4%)

【神奈川2・千葉2・埼玉1・茨城1・群馬13・栃木0・東京0・福島1】

表13

三角縁神獣鏡以外の鏡の年代別出土数

福岡県 (610)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳(詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	15	—	4	96	33	84	11	80	87	25	3	20	11	48
					弥生Ⅳ～Ⅴ	弥生Ⅴ～ 庄内式並 行期	弥生Ⅴ～ 古墳前期	庄内式並 行期～ 古墳前期	古墳前期 ～中期	古墳中期 ～後期				
					5	6	46	1	2	32				
大分県 (90)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	4	—	—	—	—	20	5	13	11	6	—	12	—	13
						弥生Ⅴ～ 庄内式並 行期		古墳前期 ～中期						
						4		2						
熊本県 (117)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	9	—	—	—	—	21	—	14	23	11	—	23	2	12
						弥生Ⅴ～ 庄内式並 行期	弥生Ⅴ～ 古墳前期							
						1	1							
山口県 (61)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	5	1	—	—	—	4	8	7	22	4	2	8	—	—
岡山県 (208)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	3	—	—	—	—	1	13	49	73	13	—	38	—	18
兵庫県 (214)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	1	—	—	—	—	9	5	72	29	28	—	34	—	25
						弥生Ⅴ～ 庄内式並 行期								
						1								
京都府 (192)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	—	—	—	—	—	—	4	77	63	16	—	42	—	5
奈良県 (345)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	—	—	—	—	—	1	—	182	74	19	3	60	—	60
大阪府 (226)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	3	—	—	—	—	8	6	85	68	16	—	23	—	17
和歌山県 (55)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	1	—	—	—	—	1	—	2	20	8	—	13	—	8
						弥生Ⅴ～ 庄内式並 行期			古墳中期 ～後期					
						1			1					
岐阜県 (149)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	—	—	—	—	—	1	1	68	3	17	3	25	—	33
愛知県 (72)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	—	—	—	—	—	—	2	29	14	17	1	1	—	8
群馬県 (191)	弥生 (詳細時期不明)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式並 行期	古墳前期	古墳中期	古墳後期	古墳終末 期	古墳 (詳細時期不明)	弥生～ 古墳	不明
	—	—	—	—	—	—	—	27	12	49	—	96	—	7

※国立歴史民俗博物館(1994)国立歴史民俗博物館研究報告 第五十六集 共同研究「日本出土鏡データ集成」2

国立歴史民俗博物館(2002)国立歴史民俗博物館研究報告 第九十七集 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成補遺1 を参照

邪馬壹国の最有力候補地の一つに目されている畿内は、古墳前期から顕著に増加しており、九州・福岡と比較すると顕著に増加する時期がかなり遅れている。

三角縁神獣鏡以外の鏡の出土時期は列島の西が古く、東へと移動するに従って新しくなる傾向を示している。

つまり、邪馬臺国が九州から畿内への東征に際して、鏡は侵略途上の首長達を籠絡、謀略する道具として配付されていたと理解され、「神武(ヤマト)東征」が紛れもない史実であることを「鏡の出土状況」が裏付けているのであった。

専門家は古墳の石障や石棺に刻まれた円文などを鏡の模倣・代用品とし、沈線(垂下)を施した円文などを鏡を上から紐でつるしたような・鏡を垂下したつもりであろうなどと解説している(熊本県教育委員会 1984)。

また三角縁神獣鏡の「辟邪」の銘文から邪惡な者を退治・守護することと鎮魂の役目を鏡に担わせているが、鏡の出土が極端に少ない熊本県下では、その役目を古墳内部に施した円文(含む同心円文)に担わせ、鏡の入手が困難であったとの苦しい言い訳をする。

しかし三角縁神獣鏡の出土数が多い邪馬壹国の所在地の可能性が高い福岡県(筑前・筑後)、近県大分県(豊前・豊後)と、出土数の少ない熊襲に代表される狗奴国(火の国・熊本県)との境界が近接状況であったのは魏志倭人伝の記録からも明白である。

鉄製武器類(鉄鏃)に至っては熊本県の出土数は福岡県を凌ぎ、余程の事情がない限り「鏡の入手困難」という状況には陥らない筈である。

何故に狗奴国に代表される熊襲が統治していた中九州(熊本・宮崎)と南九州(鹿児島)では、

かくも鏡の出土数が少ないのであろうか。

故意にぼかされた3~4世紀の時代的背景が深く関係していると推察された。

結論は後述するとして、では、遙かな古代において海外では鏡がどのように位置付けられていたのであろうか。

古代エジプトの新王国時代(前1570~前1070年頃)のハヤブサをあしらった鏡は、中国・商の建国(前1400年頃)よりも古いもので「太陽円盤の形」をしているのである。

大形徹は「古代エジプト」の鏡について次のように解説している。

「太陽はエジプトの宗教の根源である。

西に沈んだ太陽は地中を旅し、東の空から再び昇る。

そのことをミイラとなった死者の復活再生感と重ねあわせた。

太陽こそが復活再生の象徴なのである。

そう考えた時、太陽の形をした鏡は、たんなる意匠、たんなる化粧道具とはみなせなくなる。」

エジプトのハヤブサをあしらった鏡の説明文では「ハヤブサは太陽神の姿をしている」という。

つまり「鏡」は、「はやぶさ」「太陽」「太陽神」「太陽円盤」などの象徴と見なすこと

図235 太陽神ラー

出典：ウィキメディア・コモンズ

Ra, the Egyptian sun god
Jeff Dahl, CC BY-SA 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>>, ウィキメディア・コモンズ経由で





図236 黄金スペースシャトル
コロンビアのシヌエ地方古代遺跡
から出土

出典：ウィキメディア・コモンズ
Pre-Columbian Birds of Otún, figures of gold and bronze typical of the quimbaya cultureSantandergrl, CC BY-SA 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>>, ウィキメディア・コモンズ経由で

ができる」と論じられているのである。

古代エジプトの神話では「太陽崇拜」「太陽信仰」がとりわけ篤く、太陽神の頂点に君臨する「ラー」或いは「ラア」は王権と深い結びつきを持ち、生命を象徴する「アンク」というアイテムでも描かれ、邪悪な蛇アポピスと戦う使命を帯びている。

その太陽神ラアは真赤な太陽円盤を頭上に戴いた男性神として描かれるが、ハヤブサの頭を持つ男性神、或いは男性神とハヤブサ・太陽円盤の三者が結合した状態でも描かれることが多い。

天空神(太陽神)ホルスとの深い結びつきを持つハヤブサは天空を飛翔する太陽円盤に象徴されるマシンの物体として見受けられ、太陽神オキクルミの搭乗機である「シンタ」を彷彿とさせる。

現在エジプト航空が所有の全ての航空機の垂直尾翼には「航行の安全を祈願して天空神ホルスが描かれている」のは誠に意義深いことである。

軍用機の国籍標識(国籍識別標)として機体に同心円文や翼・太陽・星などが採用されているが圧倒的に多いのが同心円文の太陽マークであり、古代も現在もエアロ(航空)と太陽マークが不可分の関係にあることを象徴しているのである。

古代エジプトでは「鏡」を「ホルス・太陽円

盤」と同一視していたことが明らかとなるのであった。

続いて、大形徹は「古代中国の鏡」についても次のように解説している。

「中国では最古の齐家文化(青海省、前2000年頃)の鏡の文様が太陽を象るようになる。商周時代は鏡の出土例はない。その後、戦国時代から増加し、漢代には各種各様の意匠のものが作られる。当初、鏡に銘文はなかった。

しかし、「漢日光鑑」から「見日之光」という名分が多数現れる。「太陽の光を見れば」の意味で、鏡と太陽の関連を示す。

「興天無極、如日之光、長未央」は太陽の光のように長い寿命を持つという意味で、沈んだ太陽が翌朝、また昇ることの繰り返しが永遠に続くことをいうのだろう。

徐之昌は、「漢日光鑑」の一一八(図1-3(注5))に「背中作日形、光芒四射、圍似以八角花」と背面が「日形」つまり太陽を象るという解説を加え、鏡の文様と解釈を結びつけている。

ところが、中国や日本の考古学会では、鏡と太陽を結びつけて考えることはあまりされておらず、むしろ、星と結びつけられることが多い。拙稿では、中国の古

代の鏡もまた太陽と深く結びついており、それが当時の死生観や墓制とも深く関わっていることを明らかにしたい。」

以上、「鏡と太陽信仰―東アジアの鏡の図案より―」において大形徹は、「文様と太陽」の関係、「鏡の銘文と太陽」の関係などについて、多くの資料に基づき詳細に解説しているのである。

古代のエジプト及び中国の出現期の銅鏡には、太陽を示すような文様が多く太陽信仰との関係から鏡は太陽神や太陽円盤を表現していたと考えられた。

鏡の出現期からの一般的用途として反射・発光・発火などがあるが、さらに専門家は他の用途として次の三点を加えている。

①実用的用途〔姿見〕

②呪術的用途〔辟邪：邪惡なものを退ける〕
〔依り代：神靈が出現するときの媒体〕

③政治的用途〔威信材：文化人類学用語で王や権力者を示す財物〕

①②③の何れにおいても鏡の本来の役割が見失われている。

権現山51号墳(兵庫県たつの市)より出土の三角縁神獣鏡(2号鏡)には、“邪惡な者を退ける”との意味合いの「辟邪」なる銘文と“不老不死がもたらされる”と解釈された銘文などが刻まれている。(山本誠2020)

出典：権現山51号墳発掘調査団団長近藤義郎編『権現山51号墳』1991(平成3年) (学習支援課 山本 誠)

2号鏡の銘文に基づくと、原住民側の懐柔を容易ならしめる戦術の一環として邪馬臺国はこれらの文言を故意に鏡に刻んだものと推測され、太陽円盤の化身的存在でもある鏡の役割を悪用したのである。

3～4世紀頃の日本では、中国や朝鮮半島より舶載鏡が入り、またそれらを模倣した仿製鏡が盛んに作られたが、舶載鏡の入手は三国六朝時代以後、隋唐鏡まで中断する。

西川寿勝は中国製の出土鏡について次のように解説する。

「地域ごとに鏡式と組成(発見頻度)を分析した結果、我が国出土の鏡群は中国のどの地域から発見される鏡群とも合致しなかった。しかし、楽浪郡(北朝鮮平壤付近)発見の鏡にかぎり、鏡式と組成ともにほぼ合致した。」

出典：西川寿勝2006「三角縁神獣鏡・邪馬台国・倭国」新泉社

西川の解説からは、朝鮮半島と邪馬臺国、卑弥呼及び鏡との強い結び付きが再認識された。

『三角縁神獣鏡・邪馬台国・倭国』(新泉社 2006. 11)
「ここまで進んだ三角縁神獣鏡研究」、『三角縁神獣鏡と卑弥呼の鏡』(学生社 2000. 06. 30)より

何れにしても500面を超える三角縁神獣鏡としての舶載鏡や同范鏡の約半数が、九州から東北南部にかけて築造された地域の首長墓と目される前方後円墳からの出土であり、鏡の入手、配付に関しては邪馬壹国の卑弥呼とその後継者達を淵源と見なしてまず間違いないのである。

卑弥呼及び邪馬壹国について記した魏志倭人伝の一節からは、鏡の用途として①～③よりもさらに重要な他の用途があると読み取れる。

それは“名付けてヒミコ(ヒメミコ)”という。

鬼道につかえ、よく衆をまどわす”と訳される『名曰卑弥呼 事鬼道能惑衆』の一節と、そして“鄭重に汝の好む物を賜う”と訳される『故鄭重賜汝好物也』との一節である。

鬼道からは卑弥呼が鏡に依存した霊能力者で

あることが明らかとなる。

一方、「鏡」について言及した魏王の言葉からは、女王国が他国との戦闘に勝利し、倭国の主権を担うに際して、祭政を司る卑弥呼にとって最重要且つ不可欠なツールが鏡であったと判明するのである。

宇宙時代の21世紀に到達しても尚「日本国民を精神的に呪縛し続ける」神社信仰の象徴的存在である鏡がアマテラスの神体として多くの神社に祀られており、そのアマテラスと卑弥呼には多くの共通点が浮上する。

故に魏志倭人伝の時代に相当する弥生時代から古墳時代への移行期、すなわち「ぼかされた日本の3世紀、それに続く4世紀の歴史」を紐解くに当たり、「卑弥呼」「邪馬壹国」「鬼道」「鏡」などについての解明が急務であると考えられた。

そこで、それらの解明に不可欠な魏志倭人伝を筆頭に他の関係資料に基づいて多様な視点からの解説を試みる。

まずは、関連する魏志倭人伝の翻訳からご覧いただきたい。

【1】卑弥呼・邪馬壹国に関する事柄（魏志倭人伝の関係箇所より抜粋）



図237 三角縁神獸鏡
黒塚古墳出土
(奈良県立橿原考古学研究所提供)

「その死には、棺有りて槨なし。土で封じ家を作る。始め、死して停喪すること十余日、当時は肉を食はず。喪主は哭泣し、他人は歌舞飲酒に就く。すでに葬るや、家を挙げて水中に詣り澡浴すること、以って、練沐の如し。」

「女王国より以北は、その戸数、道里の略載を得べきも、その余の旁国は遠くして絶へ、詳を得べからず。次に斯馬国有り。次に巳百支国有り。次に伊邪国有り。次都支国有り。」

「次に弥奴国有り。次に好古都国有り。次に不呼国有り。次に姐奴国有り。次に対蘇国有り。次に蘇奴国有り。次に呼邑国有り。次に華奴蘇奴国有り。次に鬼国有り。次に為吾国有り。次に鬼奴国有り。次に邪馬国有り。次に躬臣国有り。次に巴利国有り。次に支惟国有り。次に烏奴国有り。次に奴国有り。ここは女王の境界尽きる所なり。

その南に、狗奴国有り。男子が王と為る。その官は狗古智卑狗有り。女王に属さず。郡より女王国に至るは万二千余里なり。

「その国、本はまた男子を以って王と為す。住みて七、八十年、倭国は乱れ、相攻伐して年を歴る。すなはち、一女子を共に立て王と為す。名は卑弥呼といふ。鬼道に事へ、よく衆を惑はす。年、すでに長大にして、夫婿なし。男弟有りて国を治むるを佐く。

王となりてより以来、見（けん）有る者少し。婢千人を以（もち）ひ、自ずから侍る。

ただ、男子一人有りて、飲食を給し、辞

を伝へ、居所に出入りす。宮室、桜観の城柵は厳く設け、常に人有りて、兵を持ち守衛す。

「女王国の東、海を渡ること千余里にして、また国有り。みな倭種なり。

景初二年（238年）六月、倭の女王は大夫、難升米等を遣はして郡に詣り、天子に詣りて朝献するを求む。太守、劉夏は吏を遣はし、将（ひき）ゐ、送りて京都に詣る。

その年の十二月、詔書は倭女王に報いて曰く「汝の来使、難升米と牛利は、遠きを涉り、道路勤劳す。今、難升米を以て率善中郎将と為し、牛利を率善校尉と為す。銀印青綬を仮し、引見して勞ひ、賜ひて、還し遣はす。今、絳地交龍錦五四、絳地縹栗罽十張、倩絳五十四、紺青五十四を以て、汝が献じ貢いだ所の値ひに答ふ。また、特に、汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十四、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹各五十斤を賜ひ、みな装ほひ封じて難升米、牛利に付す。還り到らば録して受け、悉くを汝の国中の人に示すを以て、国家が汝を哀れむを知らしむべし。

故に、鄭重に汝の好物を賜ふなり」

「正始元年（240年）、太守、弓遵は建中校尉、梯儁等を遣はし、詔書、印綬を奉りて倭国に詣り、倭王に拝仮す。並びに、詔を齎（もた）らし、金、帛、錦、罽、刀、鏡、采物を賜ふ。倭王は使に困って上表し、詔の恩に答へて謝す。

その八年（247年）、太守、王頌官に到る。倭女王卑弥呼は狗奴国男王、卑弥弓呼素と和せず、倭載斯烏越等を遣はし、郡に

詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史、張政等を遣はし、因って、詔書、黄幢を齎（もたら）し、難升米に拝仮し、檄を為りてこれを告諭す。「卑弥呼、以て死す。家を大きく作る。径は百余歩なり。殉葬者は奴婢、百余人なり」

「さらに男王を立てる。國中服さず。さらに相誅殺し、当時、千余人を殺す。また、卑弥呼の宗女、壹与、年十三を立てて王と為す。國中遂に定まる。政等は檄を以て、壹与に告諭す」

【2】邪馬壹国に関する事柄(位置の特定にあたり中国の専門家が魏志倭人伝を解析

〔諸説あり「邪馬台国スペシャル」より〕

★藏克和教授の見解(中国教育部人文社会科学重点研究所属・古代文字研究科・世界漢字学会会長)

【九州北部説】

「古代文字の発音を漢字学の視点「音」で読み解くと、ヤマタイ国のヤマは九州北部一帯を示している。

古代の地名はその場所の「地理的な環境に影響を受ける。日本の場合は山や川、中国の場合でも「名山大山」の影響を受け名付けられる。

九州北部はヤマと呼ばれており、それに漢字を宛てた。

★張莉准教授の見解(大阪教育大学 美術・書道・教育専攻

【九州北部説】〔倭人とは何か出野正・張莉【著】〕

「ヤマは縄文の昔からあった古い地名で北九州の呼び名、いずれの国名も九州に

あり、ここより遠く離れた畿内にヤマタイの国があるのは不自然である。」

★陳長崎教授の見解(中国魏晋南北朝学会副会長)

【九州北部説】

「魏志倭人伝には歴史書として大きな欠陥がある。魏志倭人伝が魏の時代について書かれたそのものではないと考えられ、幾つかの時代の資料が融合した可能性が高い。

漢代・三国時代・西晋時代の記述が混在しており文献としての信憑性が疑わしい。」

【九州説】

「中国史に記載の距離は日本にはあてはまらない。現地人の距離感に影響され、単位に統一性がなく正確ではない。倭国を「会稽東冶(現蘇州市)の東」としていることから九州である。」

【3】邪馬壹国に関する事柄(『魏志』が語る邪馬台国の位置)

★三重大学教授 小澤毅の見解 「邪馬台国と狗奴国(第386回邪馬台国の会) Rev4 2021/4 /2 」

【九州説】

「地理的に見て、狗奴国の北に位置する邪馬台国は、福岡県に存在した蓋然性が大きい。

『魏志』に記された鉄製品や絹製品、青銅製品の出土が圧倒的に福岡県に集中する事実はそれを裏付ける。

ただ、そのなかで、鉄鏃などの鉄製武器類は、福岡県について熊本県から多数出土しており(注9)、単独で女王国(連合)と対峙した狗奴国(注10)の強大な武力をうかがわせる。

なお、『魏志』は倭の墓制に関して「その死には棺あるも槨(かく)なく、土を封(ほう)じて塚(つか)を作ると記す。「槨」は棺を納める部屋を意味するが、九州北部の弥生時代の墓制はこれと合致し、著名な平原墳墓(令制のい怡土郡、福岡県糸島市の遺跡)なども、槨をもたない木棺直葬である(3世紀の主流は箱式石棺)。

一方、近畿地方などの前期古墳は竪穴式石槨(石室)や石囲い木槨などの「槨」をそなえており、「魏志」の記述とは整合しない。それらの古墳が、邪馬台国をはじめとする「魏志」所載の倭の国々の墓制でなかったことは明瞭である。

ともあれ、以上の点からも、狗奴国およびその北に位置する邪馬台国が九州に存在したことは確実であり、両国をこれ以外の地に求める説は成立しがたい。」

【4】 鬼道に関する事柄(五斗米道と鬼道)

- ・中国では後漢末に太平道とも連携しながら挙兵した民間の多神教教団の一つ「五斗米道」が張陵により創設された。
- ・張陵の子の張衡の死後、漢中で「五斗米道」を広めていた巴蜀の巫人(巫鬼道の巫覡だった)張脩が天師道と巫鬼道を一つにして天師道の信徒を統括した。
- ・巫覡(ふげき)とは神霊と交わり託宣する呪術師でシャーマンの存在。
- ・巫は「女性」を、覡は「男性」を意味する。
- ・張陵や孫の長魯を「天師」と呼んでいたことから「五斗米道」は「天師道」ともいわれた。
- ・後に哲学である老荘思想(諸子百家の道家の大家である老子と荘子の思想)を取り入れて道教となる。
- ・しかし老荘思想と儒教が退けた迷信や魑魅

魍魎(ちみもうりょう)、変怪鬼物、巫祝的鬼神の信仰という多神教の道教と老莊思想とは本質的に乖離している。

【5】鬼道に関する事柄(道教説) ①

★安本美典の見解 「卑弥呼の「鬼道」と「原始神道」に関する公演内容より」

「元広島大学教授の重松明久は著書『邪馬台国の研究』において、次の理由から、卑弥呼の鬼道は道教的なものと述べている。

『魏志』巻八・長魯伝には、五斗米道や道教の指導者であった長魯が、寒中で鬼道によって民を導いたことが記されている。

『魏志』の編者陳寿は、鬼道という呼称を、長魯の場合も鬼道と呼んだことは、長魯の鬼道と卑弥呼の鬼道が同じように見えたと考えられる。

長魯の鬼道は銅鏡の系譜に属することはいうまでもない。したがって、卑弥呼の鬼道も道教的な色彩の濃いものと考えられる。

【5】鬼道に関する事柄(あやしげな教え・邪術説とする説) ②

★中国人の謝銘仁、張明澄の見解 「道教説を否定」

「鬼 道とは“あやしげな教え”という意味であると説く。」

慶応大学で社会学を教えていた謝銘仁氏は著書「邪馬台国中国人はこうよむ」の中で、次のように解説する。

「事」は動詞で「いとなむ」、「鬼道」は「邪術」のことである。魏志倭人伝の「事鬼道」の意味は、「邪術をいとなむ」ことである。



図238 甕棺墓

遺跡全体で1,500基を越える吉野ヶ里遺跡の甕棺墓群。南インドのタミル地域の甕棺墓との類似性が指摘され、中国西部及び韓国南西部にも分布している。
また、インドのタミル語と日本語、同タミル語と朝鮮語との偶然とは考えられない対応語が見出されている。

台湾出身の張明澄氏は「中国人の見た邪馬台国論争」において次のように述べる。

「鬼道という言葉にはそのままずばり道教という意味はない。ただ、道教をさげすむ時につかうことがあるだけである。」

【6】邪馬壹国に関する事柄(道教と古代日本)

★重松明久の解説

「道教の神学において、最高神である天皇(天皇大帝)は、その宗教的神聖性の象徴として二種の神器を持っている。

鏡と剣とがそれであり、「神器」という言葉も道教の經典である「道德真經」(『老子』)第二十九章などにその用例が見えている。」

【7】卑弥呼・鬼道・鏡に関する事柄(倭人伝の語源を探る)

そのⅠ(七) 享年八十七歳

★神尾忠和の解説 「史読に重点を置く」

※史読とは中国語と韓国語が融和した韓国語、日本語と韓国語が融和した韓国語で、漢字の音訓

を借りて韓国語を記すのに用いた表記法。

「邪馬壹国の邪は、漢音で「シャ」であり、韓国語で「サ」と発音します。馬は中国語でも韓国語でも「マ」と発音しますので、邪馬とは「シャ・サマ」と発音することになります。

壹は韓国語で「ハン」と発音し「王」の意味でも用いられています。邪馬壹は、シャマハン・サマハンと発音するので、吏読で「邪馬壹」と表現したものです。邪馬壹国とは「シャーマン王国」という意味です。韓国には韓国シャーマニズムの中心的職能者である巫堂(ムーダン)がいます。

祭壇に鎮座していた神が、巫堂に憑依するというものです。卑弥呼はこのシャーマンなのです。

シャーマニズムの定義は様々ありますが、H・フィンダイゼンによりますと「精霊によって憑依される祭司的人物の言葉と行為を焦点とする現象」とあり「憑依状態はシベリア極北地帯の呪医に典型的にみられ、かかる人物がシャーマンと呼ばれる。

この語は一般に種々の祭司の憑依にも適応され、その種々の表現がシャーマニズ

ムとよばれる」(『シャーマニズム』佐々木宏幹著より)とあります。

また、同書には「シャーマンの語はマンシュー・ツングース系諸族の呪術・宗教的職能者を指すサマンに由来する」とあります。卑弥呼が治める邪馬壹国はサマン王国という意味になるのです。

卑弥呼は「鬼道に事え、能く衆を惑わす」とあります。鬼道は韓国語で「クイト」と発音します。「クイは「貴」と同音です。貴の意味は「たつとい。うやまう。大きく目立った財貨」です。「ト」の祖語系はトッ(t o t)で「刀・銭・鉄・銅・石」と同音なのです。

これらのことから、鬼道とは「尊い導き、尊い銅」といっている事が分かります。

「尊い銅」とは「銅鏡」の事に他なりません。

倭人伝の景初二年に「親魏倭王卑弥呼に制詔・・・銅鏡百枚・・・悉く以って汝が国中の人に示し、国家汝を哀れ知らしむ可。故に鄭重に汝に好物を賜うなり」とあるところの銅鏡の事なのです。

卑弥呼がこの銅鏡をどのように用いていたかを知る一文があります。『日本の神話』(高橋鐵著)によりますと、「天の岩戸の神話で重要な役目を果たす鏡は『八咫の鏡』と呼ばれ、後に出てくる草薙の剣、八咫瓊の勾玉とともに、三種の神器の一つである。

なぜ鏡が重要視されたのだろうか。

小林行雄氏の考古学的推理によると、シベリアから中部、日本に至る各地にあったシャーマニズム(巫女が神がかりをして政治や農業上の占いをする信仰と儀式)には、榊の枝などに鏡をつるして太陽光線に反射させ、人びとの目をくらませた。



図239 画文帯神獸鏡
黒塚古墳出土
(奈良県立橿原考古学研究所提供)

そこからきているらしく、アマテラスが巫女であったことの重要な証拠である」とあります。

三種の神器のひとつである銅鏡は、卑弥呼から始まったことが分かるのです。

卑弥呼には「夫無く、男弟有り、佐けて国を治。」とあります。男弟は、隅田八幡宮所蔵の人物画像銘文に「癸未年八月日十大王年男弟王」ともあります。男弟は「卑弥呼の男の弟」では無い事が分かるのです。十大は、韓国語の吏読でヨルダ(y o l d a)と発音し、「ひらく・はじめる・あける・蓋をあける。道を拓く。関係を結ぶ」という意味なのです。

王年の王は、韓国語で「ワング」と発音し「往」と同音なのです。意味は「行くこと・これから先」です。

年は韓国語でヨン(y o n)と発音し、念と同音なのです。意味は『おもい考え、気持ち、気を付けること、深く思うこと、深く望むこと』です。

男弟の男は韓国語でナム(n a m)と発音します。この発音と同じ語に『他人、残る、余る、あとに留まる、後世に伝わる』と云うのがあります。

弟は韓国語でチェ(t h e)と発音します。この発音と同じ語に「徐、提、制、祭」と云うのがあります。

複数の組み合わせが出来ますが、祭りの意味が『神霊を慰め祈願する・奉祀する・供え物や祭壇を清める儀式を行い、神霊をまつる』でありますから、男弟とは『あとに留まって奉祀する』という意味であることが分かるのです。

卑弥呼は「王と為りしより以来、見る有る者少なく・・・宮室・楼観・城柵・巖かに設け、常に人有り、兵を持して守衛

する」という状況の中にいました。

古訓では鬼のほかにも隠と書いても『オニ』と発音し『こもる』という意味で捉えていたのです。

寺社で信者がこもり祈念する堂を籠堂と言います。

卑弥呼は籠堂・隠(こもる・オニ)堂・鬼堂で鬼道を行っていたことになります。筑後川に宝満川が合流するところに『小森野』という地名があります。ここが邪馬壹国です。

その南に狗奴国(高良神社の周囲)があるのです。

卑弥呼について、景初二年頃に“年已に長大なるも”とあります。『三国自史記倭人伝』(佐伯有清編訳)の『三国史記』新羅本紀には(倭の女王卑弥呼使いを遣わし来聘す。(阿達羅尼師今二十年〈西暦百七十三年〉五月条)とあります。

来聘とは“外国から外交使節が来朝して礼物を献じること”です。礼物を献ずる原因として考えられる事が一つだけあります。『三国遺事』日本伝に“第八阿達

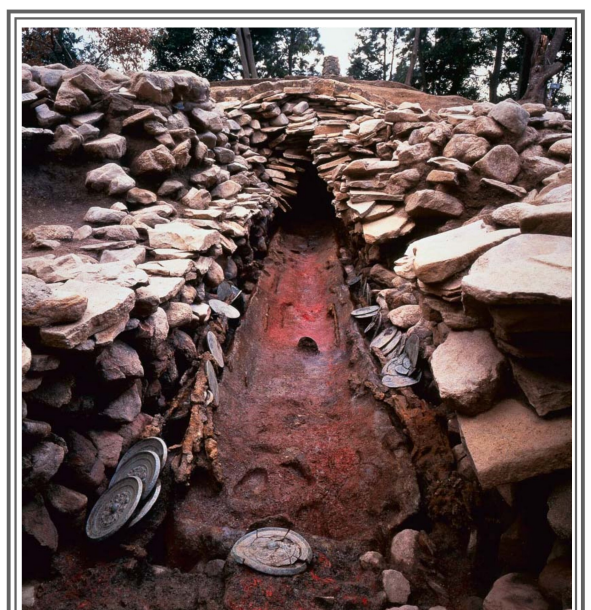


図240 黒塚古墳石室内部の鏡34面
竪穴式石室 (奈良県立橿原考古学研究所提供)

羅王の即位四年(西暦百五十七年)丁酉、東海の浜に延鳥郎と細鳥女の夫婦あり居り。一日、延鳥、海につきて藻を採りし。忽ち一巖ありし負いて日本におくる。国人、之を見て曰く。此れ非常の人なりと。乃ち立てて王と為す」とあります。

これには続きがあり、三年後の西暦百六十年妻の細鳥女が来日して夫の延鳥郎を連れて帰ったのです。

おそらくは、王となつてからは巫女がその身の世話をし、やがて子供が出来たものと思われまゝす。その子が十三歳の成人になった事の知らせと礼を云うために、西暦百七十三年に使いを遣わしたものであるのです。

景初三年(西暦二百三十八年)は卑弥呼七八歳、正始四年は八十四歳、そして正始八年は八十七歳でした。

卑弥呼の死後『復立卑弥呼宗女壹与十三為王、國中遂定』とあります。これは「卑弥呼の近くで仕事をしている巫女を、王の仲間に入れて宗女としたのでしょう。年も成年と認められる十三歳になったので、この宗女を立てて王と為す」と読むことができるのです。

『壹与』とは『王族の仲間』という意味です。」



図241 吉野ケ里遺跡
主祭殿

【8】鬼道・鏡に関する事柄(倭人伝の語源を探る 十四 鬼道の語源は銅鏡と隠(こもる)の事

★史読に重点を置く神尾忠和の解説

「卑弥呼はシャーマンです。その得意技は『事鬼道、能惑衆』とあります。事とは「仕える。奉仕する。献身的に国家・社会のためにつくすこと。仕業」の意味です。

鬼は韓国語でクイ(k u i)と発音します。これは『貴』と同音ですからその意味『尊い。珍しい。まれである。高価である』が鬼の意味になります。

道は韓国語でト(t o)、ド(d o)と発音します。これと同じ発音に「銅」があります。

銅はトング(t o n g)と発音しますが、グは聞こえず、喉の奥で「ン」という感じですから道のト(t o)と同音になるのです。

銅とは『銅鏡』の事です。倭人伝には景初二年十二月に『銅鏡百枚』、正始元年にも『鏡』を賜っていることが記録してあります。

『事鬼道』とは『尊い銅鏡で献身的に国家・社会のためにつくす』という意味になるのです。

鬼は、訓では『隠』と書いても『おに』と読みます。隠は『こもる・こもり』とも言います。

『籠る・隠もり』の意味は『すきまなくまわりを囲まれている中に入って外に出ない。』

ひそむ。ひきこもる。城中にいて防ぎ守る。寺社に宿泊して祈願する。隠れて現れないこと』です・・・(後略)」

【9】卑弥呼・鬼道に関する事柄

★高橋俊隆の解説

「陳寿が卑弥呼の巫術を『鬼道』としたのは、中国の張魯が創始した道教(五斗米道)を指していたといえます。『鬼道』という言葉は『三国志』の倭人条以外に、『魏志』張魯伝に二回、『蜀志』の劉焉伝に一回触れています。

ここに張魯の祖父の張陵は巴蜀(はしよく)。現在の四川省で巴は重慶、蜀は成都)五斗米道の創始者であり、父の張衡と張魯はその後を継いでいたことや、盧氏の母は鬼道(巫術)に長けた美貌の持ち主であることが書かれています。

つまり、卑弥呼の『鬼道』は張魯の道教に類似していたのです。あるいは、『史記』封禅書の文から、卑弥呼の『鬼道』は道教的なものではなく、越の俗人が信仰した『鬼神』であり、人々を惑わしていたというのは制御ということ、人々を治め操っていたとする説もあります。(『日本の古代』 1. 一五八頁)ただ道教的信仰は二世紀末から三世紀前半の鏡に、東王夫・西王母を鑄した方格規矩鏡が、福岡県糸島市の井原鍵溝墓で出土していることから、道教の神仙思想に基づく信仰が日本に導入されていたのは事実です。

また、卑弥呼が用いた鬼道の鬼は、朝鮮語でクイ(k u i)と発音し、また曙光をピョックイ(p y o t k i)とクイが同音であることから、光の意味の発音を吏読字で鬼と表現したといえます。

ピョッ(p y o t)は陽の意味で、クイ(k u i)は銅のクリ(k u r i)の発音からr音が脱落してクイとなります。

金はクチ(k u t i)と発音します。これは、祖語がクッ(k u t)となります。

つまり、鬼道の鬼の字義は黄金色に輝く光の存在や金や銅の輝きであり、朝日をピョックイ(曙光)という太陽信仰といえます。

鬼道は明図(ミヨンド)といわれる銅鏡と同じように、『光が導く』という意味になるといいます。

明図の図は道や導と同音で、明図は明かりが導くという意味と言います。(荊の紀氏の日本古代史掲示板より)

また「・・・朝鮮では多紐細文鏡が造られている。日本では弥生時代から古墳時代にかけて中国の円鏡が入り、これを舶載鏡といった。日本で造った鏡は倣製鏡といい、古墳時代から造られている。

(『神道史大辞典』190頁)。

弥生時代に大陸から伝わったのは漢鏡とその流れを汲む漢式鏡ではなく、朝鮮半島を中心に広がった多紐細文鏡であった。多紐細文鏡は太陽信仰に関りをもっている。」

〔『日本の古代』 I 266頁〕

【10】卑弥呼に関係する事柄〔アマテラス(天照大御神)と卑弥呼との9つの共通点〕

★安本美典の解説 〔その根拠を徹底検証する第7回より〕



図242 逆茂木・乱杭と外壕の掘削
(吉野ケ里遺跡)

1. 女性である。
2. 宗教的権威がある。
3. 夫がいない。
4. 弟がいる。
5. 「古事記」に記述のある高木神(たかぎのかみ)と「魏志倭人伝」の「女王の言葉を伝えるために出入りしている男」が符合。
6. 「古事記」にしばしば登場する「倭」の文字と、「卑弥呼は倭の女王」とあることの関連性。
7. 「大和朝廷の祖先の天照大御神」と「邪馬台国の卑弥呼」の「やまと」と「やまたい」の音が類似。
8. 卑弥呼の宗女(そうじょ)・台与(とよ)にあたる人物を日本の資料にも確認できる。
9. 卑弥呼死後の争乱と思われる記述が古事記にある。

※出典：天照大神と卑弥呼にある共通点(1～9)
安本美典

【11】卑弥呼に関する事柄(その他のアマテラスと卑弥呼の共通点)

1. 卑弥呼は鏡を好物とし、アマテラスは鏡を神体として共に祭政に用いる。
2. 東日流外三郡誌1古代編(下)には「高天原より高千穂の峯に降臨したる日向一族の預言者を比味子(ヒミコ)」と称したアマテラス神話との類似性。

【12】卑弥呼と邪馬壹国に關係する事柄(高天原から高千穂の峯に降臨したヒミコと日向一族)

「支那国の東周、平王帝の頃、日本国に於ては日向族、にはかに勢を起し猿田一族を滅ぼして筑紫の平征に日向一族は起る。この一族統率せるは、一族の預言者に比味子と称す若き女にして、一族は是

を天より降りし神と崇め、その親族を皆神とし、高千穂の峯に降臨したる天国(高天原)より来る神と信じ、諸侯は先を争ふて日向一族に味方し、忠誠を以て、死も怖れぬ諸国侵征の基を成せり。」

※出典 東日流外三郡誌 I 古代編(下) 古代東日流外三郡暦(原漢文)

【13】邪馬台国に関する事柄(原住民と日向一族)

「耶馬台国(原住民)正しくは陽茂大(ヤンマオタイ)と呼称する。

耶馬台国を大区に及び手は、南西に出雲国、南に筑紫、南東に南海道、西に越、西北に羽、北に日高見、東北に那古に分し、その下国百八十国に区せりと曰ふなり。

耶馬台国の本拠は倭にして生駒の里なりて、山陽に安日彦、山陰に長髓彦を以て国王とせり。(生駒：奈良県北西部)

その国分王に耶馬陀彦、筑紫に猿田彦、南海道に石鎚彦、越に怒戸彦、日高見に龜彦、那古に恵那彦有りて国司なり。

(中略) 耶馬台国とは遠昔の漢語にして陽茂台(ヤンマオタイ)即ち日輪に葦草の茂ゆる国と曰ふ意にして、秋津島全域の称号なりとも曰ふ。

代々にして豊けきくになれば、海を渡り来る移り民多く、筑紫に渡り来る一族日向の地に永住し、国主たる猿田彦に妖しき麗人をめあわせ、その心を捕いたれば、筑紫の国日向一族の掌に握されたり。

日向一族は、巧みなる信仰を以て能く民心を誘信せしめり。彼の一族、天なる高天原なる日輪の神なる子孫にして、高千穂の峯に降臨せしと曰ふ。

その宣言に土地民は無知故にその迷信に

乗じ、その祈祷師たる巫女に身命をも惜しまざる忠誠を以て、あまつさえ自国を彼の一族に献じたり。

依て、筑紫の国ぞ耶馬台一族の司治に反き、茲に東征の拳に達す。

耶馬台五畿七道の国王たる安日、長髓彦一族、遂には日向一族に亡ぬるはやるかたなき哉。」

※出典 東日流外三郡誌 I 古代編(下) 耶馬台五畿七道之事(原漢文)

※耶馬台国：邪馬壹国（日向一族）建国以前より日本列島に在住する原住民族の統一国家の名称

【14】邪馬壹国に関する事柄(日向一族と大麻)

「日向一族の主たち、神賜とて与ふる薬種は、人の魂を抜く大魔力薬なり。

ひとたび是を味はいし者は、この神賜酒を慾して意のままに死を怖れず尽くせりと曰ふ。

日向一族は、是なる大魔力薬を以て、津々浦々の郷族酋長に腸酒に仕込めて従かわせ、耶馬台軍の放矢の楯になしたり。

この魔力薬をなす草を大麻よりとりい出すという。麻は糸取の草にして、是は日向一族の衣を織りなすものなれば、それ

東日流外三郡誌は偽作（偽書）か！？

アカデミズムより偽作(偽書)扱いされている古代史書(古文書)の一つに、1970年代において青森県・市浦村史編集委員会が刊行の『東日流外三郡誌・著者和田喜八郎』がある。

その後、北方新社、八幡書店、オンブックスなども東日流外三郡誌を刊行した。

喜八郎の祖先といわれる和田長三郎吉次と秋田孝季が編集したという東日流外三郡誌によると、「近畿のヤマトに本拠を置いていた原住民の王国が九州から東征した武力集団日向一族(邪馬臺国→ヤマト)の侵略によって壊滅状態へと追い込まれ、深手を負った原住民の王安日彦とナガスネヒコは手勢を引き連れて東北の地へと落ち延びた。

彼らは東北において在地の部族を平定、また大陸より渡来する人々を糾合してアラハバキ神を信仰する古代共産主義ともいべき人間の王国を築き上げた。非人間的ヤマトの武力侵略に抵抗しつつ、“人間らしく生きる”という建国の意志は代々引き継がれ永きに渡り王国は繁栄した」という。

編集に当たって全国行脚を行い膨大な資料を収集したといわれているが、刊行された東日流三郡誌に写真の無断掲載と新聞記事(後に論文に変更)の盗用又は翻案(改作)があるとして、資料提供者のN氏が和田喜八郎に対して慰謝料(写真の無断掲載200万円及び論文の翻案300万円)を求めた訴訟事件へと発展した。以下、裁判所の判決結果である。

写真の無断掲載による慰謝料(慰謝料)20万円、記事の翻案に対する慰謝料の棄却 N氏控訴

・二審(平成9年1月・仙台高裁の判決)

写真の無断掲載による 慰謝料40万円、論文の翻案に対する慰謝料の棄却 N氏上告

・最高裁判所(平成9年10月・最高裁の判決) 論文の翻案に対する慰謝料の棄却

裁判において盗用、翻案は棄却されたが、だからといって偽作(偽書)説が全て否定された訳でもない。

今もって、偽作派、擁護派が互いに検証、収集した証拠に基づき論戦を交わしている。

本誌では、同三郡誌が偽作であるか否かの詳細な検証は行っていない。

しかしながら、日本の“ばかされた3世紀～4世紀”の古代史に関してその解明に大変重要な資料であると判断した経緯から、同三郡誌の23p～115pを部分的に引用した。

その解明には、日向族(邪馬臺国→ヤマト) 及び卑弥呼(アマテラス) の出自を示唆するインドの原住民「アリアン(アーリア人種)」が関係してくる。

大陸からの渡来系民族が北部九州に居住していた事実は考古学的視点からも明らかであり、

北部九州の弥生系遺跡から出土する人骨は骨学的検証からも縄文人とは明らかに相違する様相を呈し、葬祭儀礼における埋葬形態では北部九州(山口県南部)特有の甕棺墓や支石墓が使用されている。

なる草よりとりいだす魔力薬、如何にて得たるぞ、神は司る者の他に知るべきもなき。

(中略) 神をして大魔力薬とは、かかる非道のものなれば、神の大御霊にそむき奉る行為なり。」

出典 東日流外三郡誌 I 古代編(下) 大魔力薬之秘

【15】卑弥呼と邪馬壹国に関する事柄(日向一族の出自と原住民熊襲族との攻防)

「筑紫の国に熊襲(クマソ)族あり、奥州の蝦夷とともに古来より朝敵に属す。然るに、熊襲族が、かつては筑紫に君臨せし国王にして、西南より侵襲せる移渡民アリアン族に滅びたるサルタ族即ち筑紫原住民なり。

アリアン族に女祈祷師ありて卑弥呼と号す。妊術を以て日輪を暗に幽め、原住民のサルタ族を怖らしめ、国王の猿田彦に裸舞女宇津奴と称す妊婦を献じ、心を感化せしむ。

即ち卑弥呼の祖国は天の日輪国にして、タカアマハラより高千穂の嶺に降臨せし神なる神孫とぞ地族に信じせしめ、たちまちにして原住民サルタ一族を従がはしめたり。

依てその勢不惜身命にして忠節たれば、東征に及び、日本中央なる耶馬台国を長年に渡りて平ぐ。

是を後世に、無智ゆい国を侵略されたるサルタ族覚りて怒り反く。

是を熊襲族とていやむ卑弥呼族即ち日向族との間に永く攻防の戦を以て反乱せりと曰ふ。

出典 東日流外三郡誌 I 古代編(下) 日高見国
東日流古代抄 (二)

【16】邪馬壹国に関する事柄(日向一族=邪馬壹国の東征)

「(前略) 耶馬台国君主百二十三代山陽安日彦、山陰長髓彦治司の代に、南筑紫の五王猿田彦、耶馬台国本王に反し、比美子と称す女君を奉じたる渡り族に、一族挙げて東征の兵を起こしたる。

而るに長髓彦、戦いに一族の流血を防せがむとして、己が娘を彼の一族に人質として献じるも、筑紫の日向に彼の一族は猿田彦を制へて、遂に挙兵せり。

依て日頃、耶馬台国主に制へられたる西国の諸族は、是に従へて耶馬台討伐の兵をまからしめたり。

日向一族とは、是等の一族を曰ふなり。比美子とは神の占を以て一族の君となり、一族もまた日の神と信じ、活神とぞ信じ、彼の女君の告は神の勅とて従ふに到らむ。耶馬台国を討つは、彼の祖国高天原になりませる天神地神の御神勅とし、怒濤の如く東征にいでませり。

これに耶馬台国は五王を挙げて、筑紫討伐の兵を挙動せり。吉備及び赤間の戦を難儀とせる日向族は、一挙に耶馬台国本拠を討つてしまむとぞ、大船を以て内海を進軍し、遂に難波浜により、耶馬台国に攻め入りたり。

依て、耶馬台一族の主軍は吉備にあり、空しく故地の火急に駆ける攻防空しく一族は敗れ、君主たる長髓彦は肩に深き日向のいた矢をうけにして、死境をさまようが如く苦しみ、辛じて生を取得て、北に落忍たり。

奥州の合津にて、兄なる安日彦と落合い、故地奪回の兵を興さむとせるも、奥州は無知凡感の民多く、茲に日向一族討伐を断念なして、さらに北司五王なる住国陸

奥東日流の地に忍べり(後略)。」

出典 東日流外三郡誌 I 古代編(下) 安東一族
古代来歴抄 (吉備：岡山県と広島県、
兵庫県の一部)

【17】邪馬壹国に関する事柄(倭国騒乱の年代)

- ・「後漢書」倭伝に、「桓・靈の間(146年～189年)、倭国大いに乱れ、更ごも相攻伐し、歴年(何年もの間)主無し」とある。
- ・「梁書」(636年成立)、唐の姚思廉によって編纂された。東夷の条には高句麗・百濟・新羅・倭の四伝がある。「梁書」倭伝に、「漢の靈帝の光和年中(178年～184年)に、倭国に戦乱が起こり、互いに戦った」とある。

出典 竹内司 第12話 倭国乱と高地性集落、
そして卑弥呼共立—カクヨム
<https://kakuyomu.jp/works/1177354054887333022/episodes/>

【18】鬼道と鏡に関する事柄(シャーマン教より見たる巫覡朝鮮の巫子)

★鳥居瀧蔵の解説

「(中略)それから又朝鮮に於て専門の巫子となるのには、一の面白い風習がある。是は咸鏡南道と云う所で調べた例であります、永興の方では、巫子になるのには山の中に行つて鏡を發見して来なければならぬ。巫子になるには一週間も十日も山を捜して鏡を發見して来なければならぬ。

現今では必ずしも其通り行われて居らないやうですが、さうしてなるのが本式である。

其鏡というのが是出あります(實物供覧)是は同地の警察署で没収したのを大学に

寄付されたのであります。

巫子が鏡を有つて居ると云うことは、獨り朝鮮ばかりでなく、蒙古のシャーマンも同様であります。

蒙古に於いては今日喇嘛(ラマ)の佛教が盛んでありますけれども興安嶺の中や其他にはまだ喇嘛の入らぬ以前のシャーマンがある。それも朝鮮の巫子と同様に鏡を有つて居る。

此鏡は非常に威力のあるもので、悪魔を拂ひ、悪い靈魂を退けると云うので、一の神體に有つて居る。

日本の神體にも鏡になって居るのが澤山ありますが、シャーマンを信ずる所では鏡を非常に威力あるものとしている。朝鮮の巫子も其一例でありまして、鏡は是非なければならぬものとなつております。

【19】鏡に関する事柄(ミョンドという巫霊を象徴する鏡)

「・・・命橋によって結ばれた神子たちが、個々の万神の信者の中核をなすこと



図243 高祖神社

高祖山の西麓に位置した高祖神社。皇室の祖先とされるヒコホホデミを祀る。糸島地方では渡来系氏族による製鉄遺跡が認められ神社の付近には天孫降臨にまつわる名称が多い。(福岡県糸島市)

になる。

命橋は明図(ミョンドmyongdo)という巫霊を象徴する鏡とともに万神の後継者に伝えられる。

他方、前羅道の丹骨は、それぞれ場内(ジャンネ：Jangnae)あるいはタンゴルバン(tangolpan)という専官地域をもち、これは姑から嫁へと世襲される。」

出典 平凡社大百科事典第2版【朝鮮より】

※命橋(メイキョウ)・・・中部以北の万神は、巫病にかかった人が、そのときに憑(つ)いた神を守護神(身主モムチュmomchu)とし、有名な万神の下で修業して入巫する師弟継承の形をとる。賽神においては激しい歌舞を演じて憑依(ひょうい)状態になって神おろしして神託をのべることで有名である。出典 平凡社大百科事典第2版【朝鮮より】

以上、邪馬壹国、卑弥呼、鬼道、鏡などに関して記紀には記されていない重要と考えられる研究者の見解や抜粋資料を紹介した。

次の1)～5)は上記の事柄の簡略化である。

それによって「ばかされた3～4世紀の歴史」と強く相関する武力国家邪馬壹国(ヤマト)の正体が浮かび上がってくるのである。

1) 邪馬壹国の位置の特定

- ・「魏志」の解析から中国と台湾の専門家4名は、九州北部説または九州説を有力視する。
- ・邪馬壹国の東に海(瀬戸内海)はあるが、畿内の東には海は存在しない。
- ・考古資料との整合性が示唆する九州北部説。(鉄製品や絹製品、青銅製品の出土が福岡県に集中。その南側に位置し邪馬壹国に属さず同国とは戦闘状態たる狗奴国(肥後＝熊本)は、福岡以上に鉄製武器類の出土が多い)
- ・埋葬の形態において九州北部は「棺」、畿内は「槨」を主流としており、魏志倭人伝

の「その死には、棺有りて槨なし」が示唆するのは九州北部説である。

2) 邪馬壹国・猿田族・卑弥呼の出自

- ・邪馬壹国の別名は日向一族(後のヤマト)、或いはアリアン族(インド＝ヨーロッパ語系諸族の一派でインドとイランに定住したアリア民族)。
- ・日本とインドとの共通性。
(日本語とインド・ドラヴィタ語の一つであるタミル語との共通性。弥生時代の北部九州及び山口県南部とインドとの同一時代に発生した甕棺文化の共通性)
- ・大陸より筑紫(九州北部)に渡来。筑紫を治めていた原住民・猿田一族の国主籠絡。
- ・猿田一族の国土(九州北部)を奪取、筑紫の日向(福岡県西区金武の日向峠)付近に邪馬壹国を樹立して男王を擁立。
- ・原住民の籠絡に際して鏡、神賜酒(大麻酒)、或いは魔力薬(麻薬)を用いる。
- ・建国から70～80年後、邪馬壹国を含む小国同士が長期にわたり抗争(内乱)を繰り返し王の座が空位となる。
- ・倭国の争乱時期は「後漢書」倭伝では146～189年。「梁書」倭伝では178年～184年。
- ・争乱を終結するべく偽りの太陽神、或いはその子孫を自称する邪教に長けた若き卑弥呼(比美子)を部族連合の王に擁立、内乱終息。
- ・卑弥呼の出生時期170年～175年(後漢書・梁書の内容から推定)
- ・邪馬壹国の建国時期2世紀頃。
〔新羅本記173年「卑弥呼が新羅(356年～935年)に使者を派遣」との記述があるが、信頼性に欠け採用せず〕
- ・邪馬壹国は卑弥呼を太陽神、或いはその末裔であるとプロパガンダをもって奸計を巡

☆ 日向峠と櫛触（クシフル）山 ☆

高祖神社の背後にそびえる山を高祖山という。高祖神社にせよ高祖山にせよ「高祖」という文字を使用しているのには、いわれ因縁がありそうに考えられる。

元禄年間貝原好古がものした高祖神社の伝記には、歴代の天皇は、みなこの神社の祭神ヒコホホデミノミコトの子孫であるから「高祖」と書くといっている。

高祖山の南の峯を櫛触(クシフル)山という。この名称で思い当たるのは、日向第一代のニニギノミコトが高天原から降臨してきたという山を、高千穂の櫛触(クシフル)の峯といい、またその山を二上山とも

呼んでいた。

二上山とは、ひとつの山のいただきが二つの峯になっているのをいう。高祖山とクシフル山は、おあつらえむきに、ひとつの山で峯が二つになっているし、「タカスのクシフルヤマ」というのと「タカチホのクシフルタケ」というのも語呂が近い。

高祖山クシフル山と、その南約5軒の韓国山との中間にV字型に凹んだ大きな谷間をここを日向峠という。この名称は大昔、この糸島地方が日向と言われた名残をとどめているのだという人があった。

※出典 ヒコホホデミ(日向第二代)
(原田大六1966 実在した神話 発掘された平原
弥生古墳より p 17-18)

らせて人心を掌握、大衆の隷属化には魔力薬(麻薬)を用いる。

- ・卑弥呼は邪教に長けたシャーマン、鏡は祭政における最上のツール。
- ・卑弥呼が政務を取り仕切る居所には宮室(宮殿)、楼観(高楼)があり、それらを城柵が囲む〔居所の最有力候補は宮室(宮殿)、楼観(高楼)、城柵を備えた最大の環濠集落である佐賀県・吉野ヶ里遺跡〕
- ・247年、邪馬壹国と境界を接する狗奴国(熊襲系)と戦闘状態となる。卑弥呼、魏に援軍を求めるも魏王派遣せず。
- ・247年～248年、卑弥呼没。
- ・男王を擁立するも再び内乱発生、卑弥呼の血族壹與(いよ)13歳を王に擁立、内乱終息。
- ・邪馬壹国は狗奴国との戦闘に勝機を見出せず、三世紀後半吉野ヶ里を捨て畿内への東征を決意、筑紫(福岡県北部)の日向へと移動、体制を整え東征へ出発。
- ・赤間(山口県下関市)にて邪馬台国軍(原住民側)の抵抗に合い約 1年間筑紫の岡田の宮(北九州市八幡西区岡田町)にて駐留を余儀なくされる。
- ・陽茂大とは「日輪に葦草の茂ゆる国」の意で東北から九州に至る邪馬台五畿七道百八

十国の日本原住民の氏族または部族連合体。

- ・本拠を畿内の生駒(現奈良県北西部)に置き、山陽に君臨する安日彦、山陰に君臨する長髓彦(ナガスネヒコ)を邪馬台五畿七道の国王とする。
- ・天孫族を自称する邪馬壹国軍は祭政に用いる鏡と麻薬の威力で勢力の増強を諮る。
- ・瀬戸内海を東進するも、広島(田祁宮に7年)・岡山(高島宮に8年)にて邪馬台国軍の主軍(本隊)と激突、15年間近畿への東征を阻まれる。
- ・生駒から遠征の邪馬台国軍の本隊も広島・



図244 高祖山

福岡市と糸島市の境に位置する高祖山(416m)。古代山城が築かれ、頂上付近は二つの峯に分かれ、南峯を天孫降臨の地とされる「くしふる山」と呼ぶ。古くはこの地域一帯の名称は日向で、後のヤマトである日向族発祥の地と推測される。

岡山にて釘付けとなり一進一退の攻防戦を展開する。

- ・邪馬壹国連合は邪馬台国軍本隊の虚を突き難波(大阪)を急襲するもナガスネヒコ軍の抵抗に合い上陸を断念、神武は兄を失う。
- ・迂回して和歌山県の熊野方面から上陸、激戦の末原住民側の本拠である生駒を奪取する。
- ・本隊を欠いた邪馬台国軍の残留部隊は、生駒にて果敢に応戦するも邪馬壹国連合軍には抗しがたく、また味方を欺いていた身内の裏切りもあり深手を負ったナガスネヒコはやむなく本拠を捨て奥州(東北)へと落ち延びた。
- ・邪馬壹国は元々は日向族であったが、太陽神の末裔であるとの正当性を誇示すべく原住民側の邪馬台国の国名を詐称していたが、制圧後「ヤマト」に改称した。

3) 猿田(サルタ)一族

- ・陽茂大(ヤンマオタイ)、或いは邪馬台国(180か国)の一国として筑紫を領した熊襲族系。
- ・鏡と鬼道としての邪教及び妖婦にたぶらかされ領土を失う。卑弥呼を太陽神として崇め日向族への隷属を誓い東征において先導を担う。
- ・かつての原住民側の実力者猿田族(猿田彦)の先導によって、多くの原住民が戦わずして邪馬壹国連合の軍門に降る。

4) 鬼道の正体

- ・シャーマンに依存する邪教。
- ・「五斗米道や天師道」及び老荘思想以前の「原始道教」などを起源とする。
- ・シャーマンの行為における祭政の最上ツールが鏡(銅鏡)である。

- ・鬼道は明図(ミヨンド=巫霊を象徴する鏡)と同じく「光が導く」との意味を持つ。本来の鏡は太陽神や太陽円盤と強い結びつきを示すが、鬼道とは太陽神とは繋がりのない巫女や神官である似非コンタクトマンが行う邪術である。

以上、日向一族の邪馬壹国とヤマトは同一の国家、卑弥呼と天照大神(アマテラス)は同一の人物、鬼道と鏡も同一の関係性にあることが関係資料から明瞭となるのであった。

次に原住民を欺いた特別な祭政の道具である銅鏡の国内の分布状況及び出土年代について考察する。

◎銅鏡の出土年代と分布状況◎

三角縁神獣鏡の分布によると、九州では福岡県が57枚、畿内では奈良県が125枚とそれぞれのエリア内での出土数では他県を圧倒する。

北部九州の福岡県日向(現糸島市)は、猿田族の国主を籠絡してその領土を奪取した渡来系日向一族(邪馬壹国=ヤマト)の建国の地にして畿内への東征の出発地点でもある。

畿内の生駒(奈良)の地には、ナガスネヒコを王とする邪馬台国(原住民側)の本拠が置かれていた。

全国制覇を目論む日向一族にとって原住民側(邪馬台国)との戦闘の勝利から得られるであろう「本拠地の奪取」は究極の目的であると考えられた。

その大和(奈良)の地は東征した日向一族の最終のゴール地点であるばかりか、国内の「マツロワヌ原住民」を次々と武力制圧して天皇制度を築き上げた「ヤマト朝廷」発祥の地となる。

福岡と奈良の両県に共通する鏡の大量出土は単なる偶然などではない。

表14

三角縁神獣鏡の出土数・出土年代・出土場所

府県別 出土数	出土年代														出土場所										
	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式 並行期	古墳前期	古墳前 ～中期	古墳中期	古墳中 ～後期	古墳後期	古墳終 末期	古墳前 ～後期 (詳細時期不明)	不明	古墳							その他	(伝)※出土古墳 が特定できない 伝承によるもの		
															(装飾古墳)	(円墳)	(前方後円墳)	(前方後方墳)	(方墳)	(帆立貝式古墳)	(双方中円墳)			(形状記載なし)	
福岡県 (57)	—	—	—	—	—	—	44	1	1	3	—	—	—	3	5	—	(2)	(33)	(1)	—	—	—	(2)	墳墓(4) 祭祀(9)	(6)
佐賀県 (5)	—	—	—	—	—	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(5)	—	—	—	—	—	—	—
大分県 (11)	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	1	2	—	(1)	(5)	—	—	—	—	—	墳墓(1)石 棺(1)	(3)
熊本県 (5)	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	(1)	—	—	—	—	—	—	(4)
長崎県 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鹿児島県 (1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	神社(1)	—	—
宮崎県 (3)	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	1	—	(1)	—	—	—	—	—	—	—	(2)
山口県 (10)	—	—	—	—	—	—	9	—	1	—	—	—	—	—	—	—	(1)	(6)	—	—	—	(3)	—	—	—
鳥根県 (5)	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(5)	—	—	—	—
島根県 (7)	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	2	—	—	(2)	(1)	(1)	—	(1)	—	—	—	(2)
愛媛県 (3)	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—	—	(2)	—	—	—
香川県 (6)	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	2	—	(1)	(2)	—	—	—	(1)	(1)	—	(1)
徳島県 (4)	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	(3)	—	—	—	—	—	—	(1)
広島県 (6)	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	2	—	(1)	(2)	—	—	—	—	(3)	—	—
岡山県 (27)	—	—	—	—	—	—	17	—	5	—	—	—	—	1	4	—	(4)	(14)	—	—	—	—	(1)	—	(8)
兵庫県 (4)	—	—	—	—	—	—	44	—	1	—	—	—	—	—	2	—	(8)	(27)	—	(2)	—	—	(7)	—	(3)
和歌山県 (2)	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—
大阪府 (47)	—	—	—	—	—	—	41	—	—	—	1	—	—	3	2	—	(1)	(30)	—	(3)	—	—	(7)	—	(6)
京都府 (65)	—	—	—	—	—	—	57	—	4	—	—	—	—	—	4	—	(6)	(45)	(4)	(1)	(1)	—	(1)	—	(7)
奈良県 (125)	—	—	—	—	—	—	95	—	3	—	—	—	—	4	23	—	(2)	(78)	(9)	(4)	—	—	(4)	—	(28)
滋賀県 (13)	—	—	—	—	—	—	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(8)	(3)	—	—	—	(2)	—	—
三重県 (13)	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	7	—	(2)	(1)	(2)	—	—	—	(2)	—	(6)
福井県 (3)	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)	—	—	—	—	—	—	—

石川県 (2)	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)						
岐阜県 (18)	—	—	—	—	—	13	—	—	—	1	—	—	—	4	—	(4)	(11)	—	—	—	—	—	—	(3)	
愛知県 (17)	—	—	—	—	—	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(4)	(6)	—	—	—	—	(3)	—	(4)	
静岡県 (11)	—	—	—	—	—	7	—	3	—	—	—	—	1	—	—	—	(9)	(1)	—	—	—	—	—	(1)	
長野県 (3)	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1)	(1)	—	—	—	(1)	—	—	
山梨県 (5)	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	(4)	—	—	—	—	—	—	(1)	
神奈川県 (2)	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—	—	—	(1)	—	—	
千葉県 (2)	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	(2)	—	—	—	—	—	—	—	
埼玉県 (1)	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—	
茨城県 (1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—	
群馬県 (13)	—	—	—	—	—	11	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	(4)	(3)	—	—	—	—	(2)	—	(4)
福島県 (1)	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(1)	—	—	—	—	—	—	—	
計 (541)	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	庄内式 並行期	古墳前 期	古墳前 ～中期	古墳中 期	古墳中 ～後期	古墳後 期	古墳終 末期	古墳前 ～後期	古墳 (詳細時 期不明)	不明	(装飾古 墳)	(円墳)	(前方後 円墳)	(前方後 方墳)	(方墳)	(帆立貝 式古墳)	(双方中 円墳)	(形状記 載なし)	その他	(伝)弥土古墳 が特定できない 伝承によるもの
	—	—	—	—	—	—	430	3	18	3	3	—	1	19	64	0	55	295	19	10	7	1	46	16	92

※表作成にあたり、国立民俗博物館(1994)『国立民俗博物館研究報告第五六集 共同研究「日本出土鏡データ集成」2—弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成—』国立民俗博物館(2002)『国立民俗博物館研究報告第九七集 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1』岩本崇(2020)『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』を参照。

原住民温羅(ウラ)の抵抗がヤマトの東征を15年間(含む広島7年間)も阻んだ岡山県における鏡の出土数は27枚と畿内を除くと福岡県について多く、東征におけるヤマトの重要拠点と鏡の出土数が相関するのは偶然ではない。

『表13年代別・三角縁神獣鏡以外の鏡の出土数』に基づけば、福岡では弥生Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期・庄内式並行期(弥生から古墳への移行期)・古墳前期・古墳中期にかけて出土件数が増大していくのが判明する。

増大の始期は専門家の見解により多少異なるが福岡では前150年～前100年の弥生Ⅲ期に該当する。

一方、岡山・畿内での鏡の出土状況は、弥生Ⅲ・弥生Ⅳは0枚、弥生Ⅴ期は10枚以下、庄内式並行期では岡山は14枚、畿内は5枚前後で、両県共出土件数が増大を見るのは古墳前期か

ら古墳中期に掛けてである。

増大の始期は岡山・畿内では250年頃の庄内式終末期或いは古墳前期であり、出土年代は九州が岡山・畿内よりもはるかに古く、増大の始期において両者の間には350年～450年のギャップがある。

鏡の配布はまず九州が先行し、次いで350～450年後の岡山・畿内となる。

福岡と岡山・畿内において出土年代が一時期ラップしているが、これは邪馬壹国の東征に要した時間と関係しており、東征の完了には数百年の時間が費やされ、その間邪馬壹国の勢力は福岡と畿内とに二分されたと推測される。

福岡での鏡の出土年代は、「太陽神の末裔」「鏡」「武力」「大麻」などを背景とした邪馬壹国(日向一族)の渡来時期及び北部九州の

制圧時期を特定する弥生Ⅲ～Ⅴに該当する。

九州からの瀬戸内海経由での東征時期は、庄内式並行期及び古墳前期に該当する。

ついで畿内の原住民族の制圧及びヤマト朝廷の成立時期は、古墳前期・古墳中期に該当すると推測された。

また弥生後期・終末期における鉄鍬とその他鉄器の出土データ(弥生時代鉄器総覧2000)に基づく、九州(福岡・熊本)は畿内の数倍もの出土量を誇っている。

仮に狗奴国と戦闘状態にある邪馬壹国が畿内に存在するのであれば、畿内における鉄鍬の出土数はもっと大量でなければならない。

専門家は邪馬壹国(ヤマト)による神武東征(崇神東征)を事実ではないとして否定的に捉えているようであるが、狗奴国との戦闘において完敗した邪馬壹国(ヤマト)が、北部九州にて勢力を蓄えた後、古文献が物語る如く東征して山陽・畿内の原住民を籠絡、武力制圧したことは紛れもない事実であり、鏡や鉄鍬などの出土状況がそれを見事に裏付けている

のである。

「太陽神の末裔」の正当性の証拠付けとして利用された「太陽円盤」になぞらえた鏡の配布は邪馬壹国による侵略とその後の統制において極めて重要な役割を果たしており、全国制覇を目論む邪馬壹国の歴代の王は多くの鏡を原住民側の首長に配布してその正当性を強調したのである。

一方、原住民側も「太陽神の末裔」なる言葉と「太陽円盤」のイミテーションである「鏡」に何がしかの強い反応を示している。

何故なのか。

多少の相違はあるが記紀の神代記及び風土記などには、「天の羅摩船(カガミノフネ)」で降臨したスクナヒコナ(別名オキクルミカムイ)の生死を賭した活躍が記されている。

スクナヒコナは原住民側の王であるオオクニヌシを援助して全国を巡り「国造り」を終えた後、常世(天上)へと帰還した太陽神である。

カガミノフネとは太陽円盤(UFO)に他なら

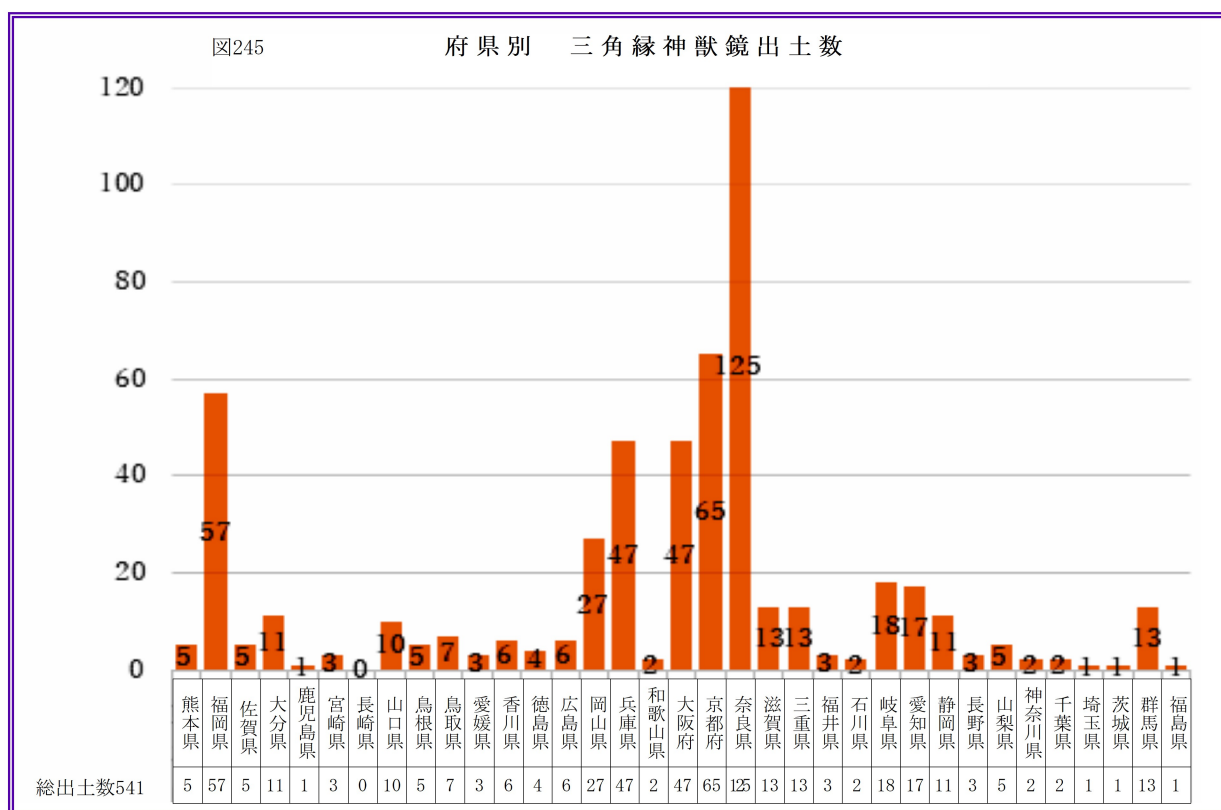


表15

弥生時代の鉄器出土数(本)

(表2) 弥生時代の鉄器出土数(本)

	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生後期・終末期	弥生後期・終末期
県名	鉄鍬	その他鉄器	鉄鍬	その他鉄器	鉄鍬	その他鉄器
北海道	1	6	1	5		1
青森		1				
岩手	1					
宮城				1	1	1
福島				1		
茨城					3	9
栃木						2
群馬					16	38
埼玉				2	1	20
千葉				15	59	78
東京				3	2	32
神奈川			1	26	7	38
新潟				3	1	12
富山					1	1
石川				3	48	133
福井				2	32	806
山梨					2	17
長野				9	25	169
岐阜						1
静岡					3	34
愛知		1	1	2	10	1224
三重				1	3	4
滋賀			8	5		2
京都		1	6	281	61	89
大阪		2	10	23	26	111
兵庫		4	15	64	84	165
奈良					1	5
和歌山				3	4	11
鳥取				11	38	358
島根				3	34	177
岡山			8	32	82	283
広島		2	6	37	57	198
山口		7	12	58	86	122
徳島			3	28		9
香川			5	56	27	26
愛媛			9	51	16	36
高知				3	45	36
福岡	2	48	46	365	231	753
佐賀		5	8	77	36	250
長崎			4	23	14	66
熊本		1	20	21	311	1254
大分		22		85	178	223
宮崎			1	6	19	13
鹿児島		3	1	4		3
沖縄				1		

(1). 鉄滓などはカウントしていません。

(2). 推定年代が古墳時代にまたがる場合はカウントしていません。

(3). 推定年代が弥生前・中・後期にまたがる場合は、古い方に分類。

「弥生時代鉄器総覧」2000年、広島大学文学部考古学研究室、川越哲志編(1653遺跡10530点以上)より、

服部静尚(2014)古田史学会報124号 5, 鉄の歴史と九州王朝 表2

ず、スクナヒコナとオオクニヌシの活躍の時代は日向族の筑紫への到来以前と推測される。

「国造り」とは古代のインフラ整備ならぬ「人間造り」の比喩的表現であり、その行為は喪失していた「人間性の復活」に直結し、天(宇宙)即ち太陽神及び太陽円盤への帰依を意味している。

スクナヒコナの帰還により原住民側が悲嘆にくれたことは言うまでもなく、彼らは太陽神

或いは太陽円盤の再臨を真に切望していたとの見方ができる。

故に「天孫降臨」「太陽神の末裔」「太陽神」なる言葉に対して多くの原住民は強い共感を覚え、陽光を反射して像を結ぶ「魔鏡」とも呼称される三角縁神獣鏡を目の当たりにした多くの原住民達は「魔鏡」の虜となったと推測される。

原住民は薄らいでいた「太陽円盤」の記憶を

その「魔鏡」によって覚醒されたことは想像に難くない。

古代エジプトや古代中国での鏡における解説からは、エジプトのホルスの目が示唆するが如く太陽神や太陽円盤(U F O)との非常に強い相関性が指摘される。

邪術(鬼道)により「鏡」の奥義に精通していた卑弥呼は、「絶対的王権」が「太陽神」「太陽円盤」からもたらされることに乗じて自らを「太陽神の末裔」とであると名乗り原住民側を貶め、己の先祖をことごとく神へと祀り上げたのである。

また邪馬壹国(ヤマト)では、歴代の王が直系の子孫の中から輩出されることと絶大なる権力を手中に収めるという大日本帝国憲法において法制化された「絶対主義的天皇制」の古代版を半ば確立したのである。

最新の形質人類学では、渡来系弥生人及び渡来系(帰化人)古墳人と日本原住民である縄文人との混血が現在の日本人であると研究成果を公表している。

となると、「東日流外三郡誌古代編」に基づけば、渡来系である卑弥呼は「太陽神の末裔」に非ず、また鏡が「太陽円盤」に取って代わることなど絶対にありえないのである。

しかしながら、原住民側が「太陽神」と「鏡

(太陽円盤)」に対して強く反応したこともまた事実であり、その反応ぶりからして原住民側のスクナヒコナへの記憶は比較的新しく、卑弥呼の登場年代とに差ほど大きなギャップは生じていないものと推測された。

全国の多くの神社(神宮・社・大社)などには、スクナヒコナやオオクニヌシが祭神として祀られている。

ヤマトは全国制覇の途上において、原住民側の感謝、尊崇の対象であるスクナヒコナ及びオオクニヌシを、ヤマトの神(先祖)と同類に扱い侵略した重要拠点に敢えて祭神として祀り上げ「太陽神信仰」を神社信仰へとすり替え、原住民の懐柔を容易ならしめるという巧妙な策略を編み出して今日に至っている。

現日本国憲法第1条に規定された「象徴天皇制」が神社信仰に尚一層の拍車をかけているのである。

三角縁神獣鏡の出土データからは、原住民側の以下の状況が読み取れる。

- ①【ほぼ邪馬壹国(ヤマト)の勢力圏に組込まれる】
- ②【一部、邪馬壹国(ヤマト)の勢力圏に組込まれる】
- ③【邪馬壹国(ヤマト)を拒絶、或いは勢力圏



図246 八面大王の足湯
(長野県安曇野市)

外】

邪馬壹国と敵対関係の熊襲系狗奴国(熊本・宮崎・鹿児島)では、三角縁神獣鏡の出土数が極端に少ない。

同様に信州、関東(除く群馬)、東北なども出土数が少ない。

この状況は、邪馬壹国の勢力が及ばなかったのも事実であろうが、「太陽神の末裔」を自認する非人間的行為の邪馬壹国そのものを拒絶したからに他ならないのである。

九州の「筑紫の君磐井」、岡山の「温羅(ウラ)」、畿内の「ナガスネヒコ」或いは「伊勢津彦」、飛騨の「両面スクナ」、信州の「八面大王」、東北の「アテルイ及びモレ」などに代表されるように、原住民側との間で繰り広げられた幾多の戦闘(本誌氏族連合体・日本の原住民Ⅰ参照)がその証左となってくる。

邪馬壹国の畿内への東征により九州の勢力図は大きく塗り替わり、邪馬壹国に加担した勢力は極めて少数となる。

菊池川流域のチプサン古墳を筆頭に、八代海沿岸部古墳や福岡県の八女古墳群の内部には円文、多重円文、直弧文などの「太陽マーク」が見る者を圧倒するが如くびっしりと並ぶ。

円文・多重円文はシンタ(UFO)の翼を休めた状態、即ち着陸状態の表現である。

宇宙とのコンタクトの結果としてそこに太陽王国が誕生、宇宙文化が開花したのである。

太陽マークの世界的分布(インド・エジプト・古代オリエント・南北アメリカなど)は、日本のみならず全世界がその恩恵に浴していたことの証であり、古代九州・熊本が王国の中心地であったことをアイヌ語の「チクシ」が物語っている。

九州における太陽マークの初現地は八代海(不知火海)沿岸東部の小鼠蔵古墳に求められており、その不知火海を取り巻く装飾古墳にはこのエリア独特の垂下等を施した円文が多く見受けられる。

「初期装飾の目的は辟邪・鎮魂ということは古くからいわれており、加えて八代海沿岸の箱式石棺の装飾については副葬品の代用としての目的も考えられている。」(乙益1974)

「横穴石室の石障や箱式石棺の内壁に鏡と見られる円文を彫刻したものである。」(高木1999)。

専門家は円文(含む同心円文)を副葬品としての鏡の代用と解釈しており、また垂下を施した円文は、「鏡を垂下したつもりであろう」ともいう。

ならば、わざわざ装飾などせずに福岡エリア



図247 アテルイの居城

奥州市水沢・羽黒山のアテルイの居城に築かれた古塚。20年以上にも及んだヤマトの侵略戦争に果敢に抵抗した東北太陽王国の雄アテルイとモレ。エミシ軍優位に戦いは展開していたが、ヤマトの謀略により両名は京都(大阪枚方か?)で斬首となる。

伝承によると、「首はうなりを声をあげて故郷に向って飛び去った」という。アテルイの亡骸を葬った古塚にむやみに触れると血の雨が降るといわれている。



両面宿儺の伝説

八世紀に朝廷によって編纂された『日本書紀』には、飛騨を統治していた豪族「両面宿儺」についての記載がある。これによると、宿儺は前後二面の顔をもち、弓・剣・斧を操る四本の手、四本の足で敏捷に駆け、身の丈は三メートル、五十人力の怪人で、朝廷の支配に従わない反乱者として描かれ、大和朝廷によって派遣された「難波宿禰」によって最後は誅罰されたとされる。

一方、飛騨において、宿儺はこの地域を開拓し、また、中央集権から地域を守った英雄であったとも伝えられ、今も語り継がれている。丹生川町にある千光寺には、江戸時代の遊行僧円空が造った両面宿儺坐像のほか石造の宿儺像が、同じく善久寺には室町時代と言われる木造彩色の宿儺像が祀られており、今でも地域で大切にされている。さらに、飛騨びとの祖先としての言い伝えもあり、この辺り（丹生川町日面出羽ヶ平）が居住地であったとされるが、美濃や飛騨金山にも伝承地があることから、各地に拠点を持っていたとも考えられている。

高山市
両面宿儺遺蹟保存会

図248 飛騨を守った英雄 両面宿儺像(左)
(岐阜県飛騨地方)

の古墳に多く見られるように鏡を副葬すればよいものを何故それをしなかったのだろうか。

参考までに熊本における前方後円墳(城ノ越古墳・4世紀後半)における三角縁神獣鏡(三角縁四神四獣鏡)の出土は1面のみである。

専門家はこの状況を鑑みて「鏡の入手困難」を指摘するが、物流において何か特別の問題でも発生していない限りそのよう解釈にはならない筈だが。

「弥生時代鉄器総覧2000年の弥生時代後期・終末期の鉄器出土数の表」を参考にすると、鉄鍬(鉄製のヤジリ)の出土数では、福岡の231に対して熊本は311。

その他の鉄器数では、福岡の753に対して熊本は1254、熊本は福岡の約1.6倍も多く出土する。

次のような熊本県・阿蘇地域の遺跡出土物に関する解説がある。

「朝鮮半島製・韓国で作られた板状鉄斧を改変した板状の斧が出土し、同地域の弥生時代後期における鉄器の特徴として狩猟具・武器・農具・工具のほとんどが揃っている。

同地域では鉄器の大量生産、大量消費が行われていた。

もう一つの特徴として、多くの外来系遺物が弥生時代後期の段階に届いており、北部九州・福岡で生産されたと思われる青銅製の武器や中国の鏡を模倣して作った模倣鏡(仿製鏡)が非常に高密度で出土した。

下扇原遺跡からは装飾に使用する青銅製品の銅釦(どうこう)も出土したが、青銅製ではなく大変珍しい錫製(スズと鉛の合金)であった。他にインド・パシフィックビーズというガラス玉が出土している。」(村上恭通2021)

熊本は全国一の鉄鍬・鉄製品の出土数を誇り多くの福岡系、外来系遺物も出土していることから物流に問題があるとの懸念は払拭される。

福岡・熊本両県で鉄鍬が極端に多く出土するのは弥生後期から終末期であり、邪馬壹国と狗奴国とが戦闘状態にあると魏志倭人伝に記録された時期と符合する。

同時期の鏡(三角縁神獣鏡とそれ以外の鏡)の出土状況を比較すると熊本・宮崎・鹿児島が極端に少ないのは歴然としている。

狗奴国は猿田一族を籠絡し、「天孫降臨」



図249 不知火
1985年9月15日撮影。 カメラ ミノルタX700 B60
500mm(エクステンダー×2使用) S. Nunokawa

「太陽神の末裔」「太陽円盤など」を偽証する邪馬壹国(ヤマト)の度重なる侵略行為に対して聖戦を持って臨み、卑弥呼が執務をとり邪馬壹国が本拠を定めたと推定される佐賀県・吉野ヶ里から邪馬壹国とそれに同調した不良分子の追放に成功している。

国内最大級の環濠集落であり繁栄の一途を辿っていた吉野ヶ里が、弥生時代後期から終末期において突然の終焉を向かえた考古学上の謎が明らかとなるのである。

吉野ヶ里の邪馬壹国(ヤマト)は九州の太陽王国への侵略はあきらめはしたが、次の一手として畿内の太陽王国に食指を伸ばし東征に活路を見出したのである。

「天孫降臨」「太陽神の末裔」の正当化には、太陽王国を傘下に収めてその地に君臨することが必要不可欠の命題であったことは火を見るよりも明らかである。

熊襲系狗奴国の首長達は「太陽円盤」を模造した三角縁神獣鏡に興味を示さず、「太陽円盤」にはなり得ないその魔鏡を拒絶し、邪馬壹国との戦闘に勝利を収めているのであった。

被葬者が女性である熊本・向野田古墳では3面の銅鏡が、同・城の本2号古墳からも1面の

銅鏡が出土しているのも熊襲系地域(熊本・宮崎・鹿児島)から出土の鏡の実用的用途が姿見であるとの指摘が可能となる。

また熊本県には、全国の約3割の装飾古墳が分布し、さらに、122群・3000基を越える横穴群が集中する菊池川流域(熊本県中部)は、邪馬壹国との戦闘における狗奴国の防衛ラインであったと推測される。

何れにしても、三角縁神獣鏡及び鉄鏃・鉄製品の年代別・都府県別出土状況からは、邪馬壹国(ヤマト)が北部九州から畿内へと東征した事実が読み取れるのであった。

◎シラスイの発現は宇宙的セレモニー◎

八代海(不知火海)を取り巻く古墳に限定される垂下を施した円文は鏡の模写に非ず。

垂下と円文との君合わせは、数千年の古代より旧暦の八朔(8月1日)の未明から早朝にかけてのみ海上に発現し、“明滅、移動、上昇、降下など”を繰返す特殊U F Oである「シラスイ」の描写以外に考えられない。

旧暦(太陽太陰暦)は月の満ち欠け(新月→満月→新月)を基準とする1年が354日である。

新暦(太陽暦またはグレゴリオ暦)は地球が太陽の周りを1周する公転時間を基準とした1年が365日(閏年は366日)である。

旧暦と新暦とでは1年間に約11日の誤差が生じるので八朔を新暦に求めると8月25日から9月23日の何れかに該当し、八朔は新暦において常に変動する。

2025年度では9月22日、2026年度では9月11日が八朔となる。

日本が旧暦を採用したのは飛鳥時代(592～710年)といわれているが、不知火の発現はそれ以前より記録されている。

年に一度の不知火の定期的発現やU F Oの出現に連動するが如き特異な行動は、儀式的要

素の極めて強い宇宙的セレモニーを連想させる。

チプサンキングの壁画が示唆するが如く、キングの輝かしい偉業に対して宇宙から数千年間継続してもたらされた無数の献灯としてのシラヌイの発現、それが八朔のセレモニーであると考察される。

だが、八代海沿岸の幾何学文様を刻む初期装飾古墳(4世紀後半)とチプサン古墳(6世紀前半)との考古学的年代比較では、チプサン古墳が新しく1世紀以上ものタイムラグが生じている。

本来ならチプサン古墳の年代が古くなる筈だが。

チプサン古墳の年代の特定には、以下の3点が採用されているようだ。

- (1) 同古墳の付近で発見された一部の人物埴輪の年代
- (2) 石室の形状
- (3) マウンド(墳丘)の形状

多くの古墳では埴輪を墳丘や造出の上に並べているが、(1)だけでは年代特定の根拠に乏し

く、埴輪の変遷では人物埴輪は古墳時代の中期中葉(5世紀中頃)からの登場である。

また(2)石室や(3)マウンド(墳丘)の形状で年代を特定することは難しく、逆にチプサン古墳が古くそれをモデルに同タイプの装飾古墳が築造された可能性も浮上する。

或いは、当初において石屋形の埋葬施設のみであったが、後にそれを覆うように石室が形成されてさらにその上に前方後円墳としてのマウンドが築造されたとの見方もできる。

マウンドのくびれ部分に石人が立てられていた背景から、(1)と(2)の築造者は九州太陽王国の最後のキングにしてチプサンキング同様に宇宙へと志向し、チプサンの偉業を称えた筑紫野君・磐井その人であつと推測された。

チプサン古墳の年代は八代海沿岸部の垂下を刻む古墳の年代を遡ることは十分に考えられ、今後のさらなる研究の課題の一つとなる。

チプサンキングの偉業を称えたシラヌイの発現当該日は、あえてシラヌイの発現を阻害す





図251 不知火
1985年9月15日(01:15~06:30)、八代市方向に発現した不知火を撮影。左右に移動を繰り返し時より発光する。後方の光点は八代市街の街燈。
カメラ ミノルタX700 500mm(エクステンダー×2使用)
F3.5 B30~60 フジカラー400 S. Nunokawa

ることのない新月(朔月)が選択されている。

そこには蜃気楼などの自然現象では片付けられない高度なインテリジェンスが感じ取れるのである。

また八朔(旧暦8月1日)は、古来より全国各地で祭りなどの祝い事が行わる特別な日でもある。

チプサンの名称が「船或いは太陽の降下」を意味するアイヌ語であることは既に解説したが、九州には他に「チクシ」「ウシ」「シト」「ベップ」などのアイヌ語と考えられる地名が多々存在する。

シラヌイをアイヌ語小辞典(アイヌ語対和語)で調べると、

「**s h i** = 大きな」

「**r a** 或いは **r a n** = 降る・下る」

「**n u i** = 火炎」

となり、「宇宙から降下する火」を意味した紛れもないアイヌ語であることが判明する。

同じく(和語対アイヌ語)では次のように訳されている。

シランヌイ(**s h i r a n - n u i**)を、

「**s h i r a n** = 空間(広きところ)」

「**n u i** = 火炎」「海上に火炎が立上る」

双方の訳は不知火の降下及び上昇(舞上がる)現象の表現であり、これらの現象はC B A Iの調査・観測(1963/9)時に出現、撮影された不知火の行動そのものなのである。

往々にしてアイヌの地名は地勢(平野、台地の起伏、向陵、三角州、山の形状、河川の蛇行や流域など)に基づく自然地名と 歴史的・文化的諸事項に基づく人文地名に大別できる。

人文地名に含まれる内容として「一生涯において遭遇した最大の出来事を後世に伝えるべくその情景を地名その他に名付ける」ケースもある。

「チプサン」そして「シラヌイ」がその典型的例と言えよう。

数千年の暗黒世界からの夜明けと宇宙時代の到来、そして究極の自然破壊である原子核の崩壊を背景とする武力国家への警告を意味した「ケネス・アーノルドU F O事件(1947/6/24)」がワシントン州レイニア(ネイティブ名タコマ)山頂付近で発生した。

ネイティブの伝承では『タコマには古来、火の湖(L a k e o f F i r e)と称される湖があり、そこからは輝くように火が発しており、そこには宇宙から全能なる偉大なる方が降下し、住んでいた。

その人の名は、別名「世界を変えるもの(C h a n g e r)と呼ばれていた」という。

日本では、装飾古墳のメッカとして世界に比類のない太陽マークで埋め尽くされた熊本が「火の国」と呼称されるが、火山現象や通常の火(灯火)に由来するものでは断じてない。

「火の国」との呼称を持つ熊本もタコマ同様、古代のある時代頻繁に太陽円盤(U F O)の来訪を受けたのであり、宇宙へと指向した民と太陽王国がそこには存在していたのである。

シラヌイとは、八朔の未明に発現した特殊U F Oが海上を乱舞、埋め尽くした「火の海」

の総称に他ならない。

「シラヌイ＝蜃気楼説」は既に前頁に於いて科学的にも否定された。

いかにヤマトが太陽王国を滅亡させようとも、宇宙とのコンタクトの証である太陽マークの痕跡や宇宙より降下する火「シラヌイ」を葬り去ることはできなかったのである。

宇宙的セレマニーに参列した「火の海」の守護者的立場にあった古代の首長達は、宇宙よりもたらされる恩恵に感謝を込めて太陽マークを己の古墳に刻み或いは描き、宇宙へと指向した太陽王国の民であったことを後世の人々へ知らしめているのである。

太陽マークを装飾する古墳を科学的、芸術的視点から考察するならば僻邪や鎮魂の役目を担う鏡の代用品などとの安易な結論を考古学者は導きだすことはなかったはずだが・・・。

以上、「不知火と蜃気楼説」「シラヌイとUFO」「邪馬壹国(ヤマト)・卑弥呼・鬼道と鏡」「シラヌイと円文に施された垂下文様」

の関係などについて考察した。

かつて、全地球規模で発生した大変動(カタストロフィー)に人類が遭遇、宇宙側は困窮する人類に対して幾度となく援助の手を差し伸べた経緯が伝承として記録されている。

日本では、アイヌモシリのハヨピラ(沙流郡平取町)の地に宇宙教師である太陽神オキクルミカムイが太陽円盤と呼称されたシンタに搭乗して縄文時代前期頃に降臨、長きに渡りアイヌを教化善導したと口承文芸は謡っている。

アイヌの固有の文化(慣習・風習)一切はこのオキクルミカムイに淵源する。

渦巻文・円文・多重円文などは、「オキクルミカムイ」或いは「シンタ」を象徴した文様であり、分布状況から日本全土がその恩恵に浴したばかりか、アイヌが日本全土に居住していたことの証左ともなるのであった。

次章では『アイヌと奄美大島の女人に伝わる入れ墨の風習』について考察する。

【2016年以降発現していない不知火？】

近年の不知火の発現状況を調べるにあたってわかったことだが、2016年以降は不知火が観測されていない。

この件について宇城市役所に問い合わせたところ、宇城市では当日の天候にかかわらず数名は不知火を観測しており、その結果、やはり2016年以降は目撃していないとのことだった。

また、2021年、2022年は本誌でも調査、観測を行ったが目撃はなかった。

少なくとも平成以降に悪天候以外で(観測している人がいないため情報が無い)不知火が目撃されていない年度はないのである。

これは何を意味するのだろうか？

2016年と言えば4月14日に熊本県を中心に最大震度7を記録した熊本地震が2度発生し、最大震源地となった益城町では2機のUFOが目撃、撮影されている。

近くには布田川断層、日奈久断層があり、同断層帯

は八代海南部にまで達している。

またこの年の11月18日には神戸大学海洋底探査センターが九州南部の喜界カルデラの調査結果を発表し、複数の熱水プルームを確認したことにより海底カルデラ火山の活動期の可能性を示した。

九州南部には他にも巨大なカルデラが複数存在しており、これらの海底カルデラが噴火すると、その影響により地球の酸素の1/3が減少する可能性を指摘している。

そうなれば現物質文明は崩壊し人類絶滅の危機となる。

2022年にトンガで発生した海底火山の噴火はその前兆となる可能性を示している。

2016以降に不知火が発現していないのは、それらの大変動が間近に迫っていることを知らせているのではないだろうか？